Mark of Black-Metals

逆月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｍａｒｋ　ｏｆ　Ｂｌａｃｋ－Ｍｅｔａｌｓ

【Ｎコード】

Ｎ０４９３Ｍ

【作者名】

逆月

【あらすじ】

人の新たなる種が関東の地で革命の烽火をあげ、混迷を全国へと広げた時代。　革命軍の中心人物だった絶望に溺れる少年と、故郷と仲間を想う希望を胸に秘めた少年が出会う時、運命の螺旋は廻り始める。

『黒鉄色のノクターン』序章、始まりの黒鉄達解禁。　多分これだけ読んでも物語として読めるハズです。

1・祇園精舎の鐘の声一

「言っておく。俺はまだあんたを完全に信用したワケじゃない」

淡々と――

「あんたの言葉にそれほど大きな期待を持っているワケでもない」

朗々と――

「ここまで付いてきたのは、単に色々と聞きたい事があるからでしかない」

深々と疲れを滲ませて、目の前の少年は語る。

俺の仲間に周囲を囲まれていながらも、寸分もそれを気にした素振りを見せず、ただ真っ直ぐに。

「話を聞いてくれるだけでも十分さ。こっちは君が何を聞きたいのかも分かっているしね。比良野悠莉君」

周りは全く眼中にない様子で、ただ気だるげに俺を見やる少年は、その言葉に初めて僅かに感情を覗かせた。

その深い漆黒の瞳が揺らめくように細められ、それに合わせて零度を下回るような寒気が体を包む。

「……最初に二つほど言っておく。一つ目は俺の『力』が完全に制御下にあるワケじゃないって事だ。あんまり俺の気持ちを逆なでするような物言いはやめた方がいい」
「そうかい。二つ目は？」
「俺はフルネームで呼ばれるのが好きじゃない。その名前の意味を知らないヤツが気安く呼ぶな」

それだけ言うとフンっと詰まらなさそうに鼻を鳴らし、目の前の少年は視線を逸らした。
途端に冷たい汗が背中を流れ落ちる。粘つくような、嫌な汗が。

黒髪黒瞳、やや背が高い痩身。頼りなさげな風貌でありながら、その少年にはどこか周りに威圧感を与えるような、不思議な存在感があった。
なにより俺と変わらない年齢でありながら、信じられないほどに冷たい視線をしていた。
いや、これはもう冷たい視線なんて生易しいモノじゃない。『虚ろな瞳』をしているのだ。プラスもマイナスも温度自体を感じない、そんな瞳だ。

「あんまり気持ちを逆なですると……どうなるんだろうな？　俺は殺されるって事かな？」
「あんただけじゃない、ここにいる全員をだ。それが俺には出来るって事を忘れないで欲しいってだけさ」

淡々と語る声にも覇気はなく、どこか虚ろなその瞳は、深く底の見えない虚（うろ）を思わせる。

『新皇』と呼ばれる存在があった。

人の新たなる可能性、変化した種、どこまでも同じ存在でありながら、僅かに違う人の変種。その『新』たな種の『皇』。そう自らを呼ばわる者達。
目の前の少年は、その『新皇の一角』で、中心だった存在だ。
圧倒的でどこまでも反則的な力を持った、人の肉体と精神の可能性が持つ極限。純正種とも純正型とも呼ばれる人の変種の中でも、格別に別格で特別な存在。
変種と人の争いが日常化するこの国でも、一番最初に人々を惹きつけ、関東地方をその力で席巻し、この国の中心を狂わせた最強の存在。
そんな存在が目の前にいると思えば、体が緊張に強張るぐらいは仕方がないだろう。
今いるこの場所は、関東で起こった変種の革命による経済破綻の余波を受け、廃棄されたビルの一室に過ぎないが、その部屋はたった一人の少年が持つ威圧感に包まれていたと言っても過言ではない。
たった一人、俺と変わらない年齢の少年に、数人の仲間達全てが圧倒されていたのだ。

「あんまり殺気立たないで欲しいな。俺達はまだ荒事にはそんなに慣れていないんだ」
「そうかい。それは何よりだったな。こっちは今まで平和だったみたいで羨ましいよ」
「……なんでそんなに不機嫌なのか、突っかかってくるような物言いなのか、聞いてもいいかい？」

正直な話、新皇などと言っても、変種としての能力――普通の人が持ちえない異能力に頼っただけの存在だと思っていた。
他人より高い身体能力と、人の持ちえない超常能力じみた力、それによる自信が過信に変わっただけの、薄っぺらな存在だと思っていたのだ。

だが、目の前の少年は違った。
この少年には、どこまでも孤高で孤独たりえる、『皇』という言葉からイメージする通りの存在感があったのだ。
皇、あるいは王とは、本来孤独なモノだと思っている。人々の先頭に立つ者とは、すべからく孤独たりえる者だ。
先頭に立つという事は、前には誰もあらず、横にも誰かが並び得ない。そういう事だから。
そういった意味で言えば、目の前の少年が『新皇』だというのは、規定事項に近い感覚で自然と認識させられる。
そんな存在が目の前で苛立っていれば、自然と体が竦んでしまうのも仕方がないだろう。
その雰囲気に、周りを囲む仲間達が青ざめるのも無理はない。
最初は『所詮はただのガキ一人』……そんな認識すら仲間達にはあったのだろうが、今の時点でもそんな認識を持続させている者はいまい。

「単に話を聞きにきただけで、こうやって囲まれたらいい気はしないだろ」
「俺が言った『お前の世界（力）を抑えこんでやる』という言葉が単なる餌で、ここに誘い込まれただけだったんじゃないか……そう落胆してるワケだな？」
「……それもある」
「それがほとんど、だろ？　これっぽっちの仲間で囲んだところで、あんたが脅威を感じるハズもない。そうだろ？」

俺の言葉に図星を指されたのか、ムスッと黙りこむ少年――比良野悠莉という名の元新皇に、俺はニカッと笑いかける。
その異様で威容な雰囲気を裏切って、随分と分かりやすいヤツだと思った。そんなところだけは年相応だと感じられたのだ。
周りの仲間達――新皇を警戒してこの場に付き合ってくれた連中

も、少し戸惑ったような雰囲気を滲ませる。
一瞬だけ見せた年相応の若さに、呆気に取られたのかもしれない。
「言っておくけど、俺は嘘を付いちゃいない。ここの連中は、単に珍しいモノ見たさで付き合っているだけさ」
「……興味本位の眼差しを向けられるのは好きじゃない。俺みたいなヤツが見たいなら、関東（向こう）に行ってみればいい。あっちじゃそこら中に溢れてるよ、絶望ってヤツがね」
「悪いね、気分を害するつもりはなかったんだ。でもここにいる連中はみんなこれから仲間になるんだからさ、あんまり固く考えんなよ」
「まだ仲間になるかは決めていない。その為の条件が揃っていない」
そう言って、その深い虚のような漆黒の瞳を真っ直ぐに俺へと向けてくる。
色白な肌に映える黒い瞳でありながら、その何処か『蛇』を思わせる冷たい視線を。
彼が何を言いたいのかはわかる。その条件が何を差しているのかも。
人としては持ち得ない、純正型として圧倒的な『力』を抑えて欲しい――それが彼の願いである事を俺は聞いていたから。
「あぁ、そうだな。まずは俺の能力――純正型としての俺の『世界』を見せておこうか」
しかし、その為に必要な言葉を口にしながらも、脳裏には初めてこの少年に出会ったあの時、あの場所での事が思い返されていた。
あそこで出会うまでに様々な紆余曲折を経て、色々画策して、その果てに結局は偶然に味方されて出会ったあの瞬間の事を。

「じゃあ『彼』がこっちに流れてくるのは間違いないんだな？」
「えぇ。あの人は父親に連れられてこの関西に堕ちてくる。抱えきれないほどの絶望に苛まれながら、ね」

目の前に座る、季節柄としてはやや外れた感のある涼しげな和服……浴衣を着た女性の言葉に、興奮にも似た高ぶりを覚える。
涼しげな容貌と怜悧な視線を持つ彼女に、その内面の高ぶりを隠せていたとは思わないが、それでもなんとか普段通りを装って言葉を続けた。

「……やっと会えるってワケか」
「会えてからの方が苦労すると思うわよ？　そこからはあなた次第、ってところかしら？」
「気難しいヤツの相手は慣れてるさ」

肩をすくめてみせる俺にも、彼女は小さく笑みを浮かべるだけで、そっと顔にかかる藍色の髪を軽く払ってみせた。
そんな普通の仕草にすら、どこか気品じみたモノを感じさせるのだから、ひょっとしたら彼女は結構いいところの生まれなのかもし

れない。
もちろんそんなプライベートに無闇に立ち入って、彼女を怒らせるつもりは毛頭なかったが。

『レン』とだけ名乗ったこの女性に出会ったのは、もう一月近くも前の事だった。俺が立ち上げた携帯用の情報収集サイト……情報屋『ＡＫＡＴＳＵＫＩ』の個人サイトに連絡が入ったのが始まりである。
しかもご丁寧に管理者専用の管理ページに入り込んで足跡を残しただけではなく、ページに隠してあった仲間達用の連絡スペースを見つけだし、わざわざそこに書き込みがあったのだ。
このサイトの管理ページにはパスを幾つも設け、個人サイトとしては異常なほどのファイアウォールで覆っていたのに、だ。
しかもその書き込み自体も、意味のよく分からない内容だった。
曰わく――

『深い絶望を抱えた東の皇、西へと下る。その絶望が膨らみ、零れ落ちる時、あなた方が羽根を休める神の社は灰燼に帰すだろう。そしてこの国は新たな皇達の狂える楽園と化す。
私はいまだ人である、最後の皇の心を守ってくれる場所を探している。その場所がいずれ皆の希望を繋ぐ始まりの地となるだろう。
私はあの方を迎え入れてくれる者を探している。私一人ではあの人を救う事が出来なかったのだから』

――そう書いてあった。
当然その言葉の意味は全く分からなかった。普段なら……今の御時世でなければ、この書き込みにある言葉の一つにすら意味を見いだせなかっただろう。
あるいはこんな御時世だからこそ蔓延している、カルトな宗教の

回し者と思ったかもしれない。

俺が情報屋でなければ……あるいは変種と既存種の争いに関心がなければ、この書き込みは発信者の所在を確かめて、然るべき対処と対策を施した後、すぐさまゴミ箱行きだった事だろう。

しかし、この書き込みには、俺の興味と情報網に引っかかる言葉が幾つもあったのだ。

まず関心を引いたのは『東の皇』、新たな皇『達』、『神の社』、この三つの言葉だ。

東の皇、そして新たな皇達とは、おそらく関東にて混乱を撒き散らす『新皇』の事だろう。それはすぐさま予想がついた。

しかし、この時点で新皇の呼称を知っている事からも、この書き込みをした人物がかなりの情報通である事が窺えた。なにしろ関東で革命を起こした連中の中心、『新皇』という人物に対する呼称は、メディアでは報道されてはいないのだ。

おそらく情報規制がかかっているのだろう。日本のような民主主義の立憲君主制国家では、『王』の存在は象徴以外では有り得ない。ましてや革命を起こす側に『皇』を認めるワケにはいかないのだろう。諸外国に対するメンツとか、大人の事情ってヤツが深く関係しているんだと思う。

つまり『新皇』の存在、その呼称自体が、この国にとって最大の禁則に近い。

そして『皇達』という呼び方。

『新皇』という存在を知っている者はまだいるだろう。いくら隠してあっても、そういった情報ほど流布しやすいモノだ。

人の口に戸は立てられない。噂の流れを変えるスイッチを押すには、今の状況じゃ遅すぎる。

しかし、新皇という存在が『複数の変種からなる者達』だと知る者は、おそらくほとんどいないハズなのだ。

情報を扱う者としては凄腕を自認する俺でさえも、この情報には確信を持てていないのに、この書き込みにはそれを匂わせる記述がある。

それがまず俺の興味を惹いた。

しかし連絡先は記されておらず、連絡のしようがない。

クラッキングされて入り込まれた様子はなく、その手並みは鮮やか過ぎるほどだ。

この手並みからしても、簡単に尻尾は掴ませてはもらえないだろう事は間違いない。

そう考えて……俺はその書き込みを詮索する事なく放置する事に決めた。

下手に所在を突き止めようとしても、あっさり気付かれてしまうだろう。それに警戒して、連絡をしてこなくなったのでは、この謎かけのような言葉の真意は分からないままだ。

『このサイトのどこかにアドレスを記載する。連絡を待つ。ＡＫＡＴＳＵＫＩ』

だからこれだけを返答して、返事を待つ事にしたのだ。

その仲間達専用ページに入れるヤツらは、みんな俺のアドレスを知っていたし、もし誰か他にも見ているヤツがいても（まず有り得ないだろうとは思っている）、俺が隠したアドレスを見つけるのは一苦労だろう。

そうして待つ事一週間、直接連絡をしてきたのが、『レン』と名乗る彼女だったのだ。

会う為に指定してきた先は俺の故郷、『神杜市（かみもりし）』にある建設中に

破棄されたビル。
まさに神の社を冠する街の一角だった。
彼女には俺の所在地ですら分かっていたのだろう。これが三つ目のワードに引っ掛けられているのは間違いない。

『あなたは単なる好奇心が過ぎる猫さんかしら？　それとも私が探しているような人かしらね？』
『……好奇心は猫をも殺す、って事かい。物騒だね。どう判断してくれてもいいけど、簡単にはいかないと思うよ』

会って早々、そんな物々しいやりとりから始まった話し合いは、重い沈黙がしばらく停滞した。
彼女……レンは、俺とそう変わらない年齢でありながら、冷気にも似た冷たい殺気じみたモノを放っていたし、見知らぬ人物に会う事になった俺の身を案じて、文句を言いながらも付いてきてくれた仲間――少し離れた場所にいる剣匠（ソードメイカー）と仲間内で呼ばれる少女は、それに呼応して派手に殺気立つしで、あまりにも心臓に優しくなさすぎる空気が充満する。
それが緩和したのは、五分だか十分だか、あるいは数秒に過ぎないかもしれない時が経った頃。
レンと名乗った彼女がやんわりと微笑んだ事により、その冷たい空気は霧散した。

『お友達想いな後ろの彼女に免じて合格にしておくわ』

そして彼女は深々と頭を下げてみせる。
睡蓮の描かれた白い浴衣に映える藍色の髪――無造作に切り揃えられただけの綺麗な髪をサラサラと流しながら。

『初めまして。私は道の一人にして、今では『灰色の皇』と呼ばれ

るお方に仕えるガード、名前はレンと申します。あなた方みたいな方々にお会い出来てとても嬉しいわ』

そう言って、新皇の一角である『灰色の皇』の側近中の側近にして、藍色の髪を持つ『ガード』を名乗ったレンは、ニッコリ笑ってみせたのだ。

――これが俺、非合法な情報屋兼何でも屋である『ＡＫＡＴＳＵＫＩ』と、関東で革命を起こした変種達の中心、『新皇・比良野悠莉』との出会いへの一幕。

そして関東から広がった混迷の渦が、俺達の故郷へもその手を伸ばした時期の始まりの物語。

1・祇園精舎の鐘の声一（後書き）

あとがきだけどはじめに。
この物語は、『黒鉄色のノクターン』を書く上で作っておいた設定、過去の状況などを物語風にしたモノです。
つまり単なる設定としてあっただけで、陽の目を見る予定はなかった話です。
読みたいと言って下さった方がいましたので、公開する事には致しましたが、逆月のノリで書いている部分も多々あったりします。
目標は……うーん、半年完結で。
あくまでも努力目標です。

一応この話だけでも補足なく読めるように書いてあるつもりです。
多分問題なく読めるかとは思います。
それでもわかりにくい方とか、深いところに興味を持たれた方がいましたら、この物語の約四年後のストーリー『黒鉄色のノクターン』をお読み下さい。
そちらは一部は完結で、二部に入っています。一部だけでも読み応えはあると思いますので、よろしくお願い致します。

あと、感想や誤字、表現のおかしな箇所がありましたら、ご指摘下さいますようお願い申し上げます。
感想があれば……更新スピードは結構いっぱいいっぱいなので、上がりはしませんが、ストーリーの出来や誤字脱字への注意力は変わるかもしれません。
最近は誤字脱字も減ったかと思うんですけどね。

毎週月曜日に黒鉄系のどちらかを更新致します。
次回はノクターン二部本編……の予定です。

2・祇園精舎の鐘の声二

「あの人がこっちへ落ちるための手筈は私が整えているわ。それはそう先の事じゃない。そうね、遅くとも五日以内ってところかしら」

何度か顔を合わせ、情報のやり取りを交えた雑談を交わした後、そう彼女が本題を切り出したのは、出会ってからすでに十日近く経ってからの事だった。

おそらく、俺という人物の人と形を会話から窺い見ていたのだろう。雑談の形を取った会話にも、ところどころに俺を試すような箇所や、こちらの考えを探るような物言いがあったのだ。その考えもそう穿ち過ぎたモノではないと思う。

だから『やっとか』とは思ったけれど、それを口に出すような真似はせずに彼女が言葉を続けるのを静かに待つ。

こちらとしてはさっさと本題に入りたいところではあるが、彼女の用心深さが異常と言えるほどのモノだという事も分かっている。

ここで変に先を焦らせては、今まで我慢を重ねて会話を交わしてきた事が全て無駄になるかもしれない。

彼女は本当に『皇』という存在を敬っているのだろう。それは今までの会話からも充分に窺えた。

危険の匂いが少しでもすれば、すぐさま俺の元から離れてしまうに違いない。

彼女の力があれば、俺の助けがなくとも逃げ続ける事ぐらいは出来るだろう。

ただ逃げ続ける事など望んでいないからこそ……居場所を求めたからこそ俺に接触を図ったに過ぎず、俺やこの街が危険だと感じれば、躊躇いなく俺にもこの街にも背を向けると思う。

「あの人は明日、狂った仲間達を抑えようと最後の賭けに出るわ。私の仲間達数人を引き連れて、新皇の中でも最悪の存在、『絶対毒の皇』を止める為に動き出す」

「絶対毒の皇、ね。それで君の従うリーダーには勝ち目があるのかい？」

新皇対新皇か。非常に興味深くはあるかな……そんな事を考えながらも、一応念のために確認の言葉をむける。

もちろん質問に対する答え自体は予測出来てはいたけれど。

「残念だけれどあるとは言えないわね。もしそんな可能性があるのだったら私はここへ来てはいないわ。向こうであの人と共に戦う道を選んでるわよ」

「なるほど」

道理だね。そう呟いてみせながら大仰に溜め息を漏らしてみせる。

そして今得た情報から考えられる事を脳内でざっとまとめていく。

彼女とその仲間達……恐らくガードと呼ばれた連中は、失敗は覚悟の上でクーデターを起こす、そういう事なのであろう。

新皇の一角を旗頭として。

もちろん彼女が仕える新皇が勝つのならば問題ない。

そうなる事が彼女には理想的なのだろう。

他の人々――民衆にとってその結果がどういう意味を持つのか……そこまではさすがに分からないけれど。

だけどそんな計画があるのに彼女はここにいる。それがどんな意

味を持つのかは簡単に想像がつく。
彼女の能力や実力のほどは分からないが、俺の仲間達の中で一番強い能力を持つ少女――剣匠とも呼ばれる雪代（ゆきしろ）の言を信じるのならば、彼女でもレンに勝てるかどうかは正直怪しいところらしい。

『ありゃ間違いなく人を殺した事があるねぇ～。その辺りの覚悟とかを考慮したら、正直ちっと厳しいかにゃあ～。みんなでかかかればいけるだろうけどさぁ』

実際に向かい合って、殺気立ちあった彼女がそう言っていたのだ。
レンは間違いなく強力な能力者で、俺の仲間達などよりずっと深い経験を持っているのだろう。
そう、荒れ狂う関東地方で人が殺し合う地獄を見てきたに違いない。経験という力を俺の仲間達よりもずっと持っているんだと思う。

それらを考慮して推測出来る事は、このクーデターじみた計画は、失敗を覚悟して……などと生ぬるいモノではなく、『完全に失敗を前提条件に置いて』動き始めている、という事だ。
そうでなければ、レンの言の通りこの場に彼女はいないだろう。
ガードの一人であり強大な戦力でもある彼女は、クーデターに失敗した後、灰色の皇が落ち延びる先をあらかじめ探す役割を負っているのだと思う。
邪推になるかもしれないが、恐らく向こうで行動を起こす他のガード達は、クーデターの首謀者としての役割――つまり最後には処刑される役割を負っているに違いない。
そう考えれば、十日もかけて俺とやり取りを交わしていた、彼女の異常なまでの警戒心にも納得がいく。
彼女は事が終わった後の全てを、同僚達から託された立場にあるのだろう。だからこそ失敗は許されない、そう思い詰めていると考えれば彼女の態度にもしっくりとくるのだ。

「向こうでの行動が失敗に終われば、あの人は多分身動きを封じられる。絶対毒の皇はあの人に固執しているからね」
「固執、ね。二人は何か特別な関係なのか……とか聞いたら、さすがにちょっと聞きすぎかい？」

『あなたには関係ない』そう言われたなら諦める程度のつもりで聞いた言葉に、彼女は軽く小首を傾げるだけで言葉を続ける。

「幼なじみなのよ、あの二人は。絶対毒の皇からすれば、あの人は昔からずっと側にいてくれた家族代わりに他ならないわ。変種が蔑視されていた時代からずっと変わらずに側にいてくれた存在。本当の家族ですら恐れた絶対毒を、受け入れてくれた存在。それが灰色の皇なのよ」
「そりゃ大した絆だな。実物は見た事ないけど、向こうの変種への差別のキツさは話に聞いてるよ。かなり酷いモンだったらしいな？」
「えぇ。本当に酷い場所だった。革命を起こす前から、変種ってだけで学校への入学を断られるのよ。変種だけが集められた収監所じみた学校もある。普通の学校に入った子の中には、イジメなんて生ぬるい真似じゃなく、学校で拷問じみた真似をされた子もいる。大人でも変種ってだけで家を追い出されるし、まともな仕事には付けないの。変種は変種という種族の解明の為に、人体実験の被験体をさせればいい……そんな事すら言われていたの。信じられないでしょ？」

苦味のある何かに思いを馳せるように……そして吐き捨てるかのようにそう言うと、軽く俯きながらレンは小さな嘆息を漏らした。
儚さと弱さ、深い憂いを秘めた重い吐息を。

変種への差別――。

そんな話は今でこそ珍しくもなんともない。まだ関東ほど酷くはないが、この関西でも変種を拒絶する学校は増えてきている。
中学校や小学校でも私立じゃそんな場所があるほどだ。
そして親達は、変種と子供を関わらせない為に――そして自分の子供は変種じゃないというアピールの為に、高い金を払ってまで子供を私立へと入れるのだ。
でも関西でそんな事が起こり始めたのは、関東での革命以来だ。それなら納得は絶対に出来ないにしても事情はまだ分かる。
納得は出来なくても、変種が危険視される理由はあるのだ。

だけど関東や東北は違った。
もちろん海外で起こった変種による革命――総統を名乗るリシャール・ベルナンドによる戦火の影響はあっただろうが、それ以外にもこの二つの地方から変種の蔑視が広がった理由はあると俺は考えていた。
東北は昔からの風習を残す場所が多く、老人の比率が多い村落が多かったゆえに、人と違う存在を忌避する人々が多かったのだろう。そこから古い考えが広がっていったんだと思う。

そして関東は、人が多く、経済の中心だったからだ。
人口が多く、情報が早いがゆえに、人の弱さや汚さが広がりやすかったのだろう。
そして経済の中心ゆえに、海外から始まった恐慌に、人々の心理が他よりも影響されやすかった。
そんな中で、仲間達を募ってちょっとした暇潰し感覚から『目立つ変種を狙うという遊び』を始めたヤツらがいた。それがあっという間に広がって対立が始まり、それにさらに社会が影響されていった。
始まりは多分それだけなんだと思う。

「気分の悪くなる事を言ってごめんなさいね。続けるわ」
それだけを言って軽く咳払いをすると、レンは今まで浮かべていた笑みを作る。
無理をしている事は明らかだったが、声をかける事はできなかった。
向こうの状況を情報でしか知らない俺の言葉は、多分気休めにもならないだろうから。

「あの二人は新皇の中心というだけじゃないわ。あの二人が始祖なの。いわれなく蔑視される変種達の為に立ち上がった最初の二人。中心になった始まりの二人よ」
「始祖……か」
「そう、誰が呼び出したのか二人は最初に新皇と称され、最初に変種の皇と呼ばれ始めたわ。そしてその内の一人は、変わらない現実と人の汚さに絶望してしまった」

それが始祖、新皇か。
関東で反乱を起こした人物にあやかっただけじゃなく、新たな種族の皇達という意味の総称。

「向こうで起こすクーデターじみた計画には、他の新皇達の手は借りられないのか？」
「白銀の皇なら絶対に手を貸してくれるハズだけど……彼女はダメね。私の皇がそれを望まない。だから今は灰色の皇の言葉で北陸方面に出向かされてるわ。他の皇は論外ね。むしろ事前に相談なんか持ちかけようものなら、敵に回る可能性の方が高いぐらいよ」
「新皇達の関係もなかなか複雑に入り乱れてるみたいだな」

さて、ここまで色々と話してくれるのは、信用してくれたからか、

あるいはまた俺を試しているのか……頭を切り替えてそんな事を考えながらも、軽い調子で肩をすくめてみせる。
それに同じように肩をすくめてみせながら、レンはその蕾のような小さな唇をほころばせた。

「当たり前でしょう？　新皇と言えども人間なの。最強の変種と言っても一人では生きていけないわ。二人以上人間がいれば依存も共存もして生きるの。三人以上いれば敵対する者も出てくる」
「そう……だな。当たり前だよな」
「そう、人間なら当たり前よ。それが分かっていない人がこの国には多すぎる」

彼女の切なそうな言葉になんと返せばいいのか、またも言葉が上手く出てこない。
当たり前前――本当に当たり前だ。
俺も変種、しかも純正型ではあるが、自分が他の仲間達と違う存在だとは思っていない。
俺も一人はやっぱり寂しいし、二人でもまだ寂しい。三人いれば好きなヤツとそうでもないヤツが出てくるだろう。
楽しい時はやっぱり多くの仲間と分かち合いたいし、悲しい時は誰かに側にいてほしい。
そう、それが当たり前だ。自分を顧みても当たり前の事なのだ。

……でも俺は、新皇という連中にその『当たり前』を当てはめて考えていただろうか？
そんな事を考えてしまう。
俺の価値観と彼らのそれが、同じモノだと考えていただろうか、と。
考えるまでもない。答えは分かりきっている。ノーだ。
彼らを特別視していたのはこの俺も変わらない。彼らのその力を

一番に見て、それを勝手に恐れて、目的の為に上手く使えないものかと考えていた事は、否定しようがない事実だ。
そんな汚さが俺に『アレ』を作らせたのだろうから。
レンが仕える新皇が狂っていたら――そんな疑心暗鬼が、いざという時の為という大義名分を得て、俺に始めて力を求めさせたのだから。
俺がやるしかない、関西(こっち)じゃ俺ぐらいにしかやれない。それも命を捨ててなんとかフィフティフィフティ。なんとか対等でしかない。
そう言い訳をして、だ。

それは――そんな事実は、とてつもなく重い。
『ノーフェイト』という名前の仲間を守る為だけに作られたはずの造物。
俺の力を受けたその造物が何故か忌まわしく感じられる。
当たり前を見れておらず、こっちの勝手で新皇という力を求めて、その上で危機感に震えていた俺。
昨日まで考えていた『いざという時は俺が新皇を殺すしかない』という覚悟は、どこまでも身勝手な思惑から出た、どこまでも都合のいい甘えに過ぎない。
レンの言う『当たり前』という言葉から、そんな考えに捕らわれた。
レンの軽い口調にこそ考えさせられた。目から鱗と言ってもいい。
ぶつかり合うのは構わない。いざという時には対立する事もあるだろう。
でも分かり合う覚悟もなく、理解する方法を極限まで求めないままで、最後の手段――戦争に備える事は間違いなく最低だ。
そう自己嫌悪に陥ってしまう。
そんな心情に気付いていないのか、あるいは気付いていても気にしていないのか、レンは真っ直ぐに見返してくる。

先ほどまでの儚さを押し込めた優しさを感じる表情で。

「ともかくこの五日が勝負ね。あなたが受け入れてくれるというのなら、私はすぐさま関東に取って返して、幽閉されるであろう皇を救い出す為の準備をしたいところなんだけど」

「俺を信用しちゃっていいのかい？　俺は――」

そんな彼女に、俺はひょっとしたら敵に回るかもしれない……そう正直に言いたかった。

ここ十日間ほどレンとこうやって話をしながらも、皇を殺す為の手段を準備をしていたのだ、と。

危険な存在なら――言い換えれば、その力を利用出来ないのなら殺してしまうしかない。そう考えていたのは事実なのだから。

戦う為の力を持たない『創造者』でしかない俺が、狂った変種の皇と相討ちなら上等だ。そう考えていたのだ。

当たり前を見れていなかった俺。利己的な俺を信じてもいいのかと……そう言いたかった。

しかし、俺が口ごもっている間にレンが先に口を開く。

「話してみて、あの人と。そうすれば絶対に分かるわ。あの人が壊れていくこの国に必要な人だって……あなたなら絶対に分かる」

少しだけ笑いながら。

試すかのようにその藍色の瞳を細めながら。

『あなたなら向かい合うだけの覚悟があるでしょう？』そう言いたげな、ちょっと挑戦的な笑みで。

「あなたは凄く賢いわ。でもとても不器用な人ね。それが分かっただけで私には充分よ。そんなあなたはあの人と本当にそっくりだから」

「それは誉めてんのか？」
その言葉に思わず憮然とした表情を浮かべる俺に、レンは笑いながら立ち上がった。
「最大級の賛辞よ。私にはこれ以上の誉め言葉は思い浮かばないぐらい」
その細くしなやかな手のひらを差し出しながら。
「『信じると決めたなら信じきれ。それが信頼ってヤツだろ』……そう私はあの人に教えられているわ」
「その皇との接触方法は俺に任せる……そういう意味に取っていいんだよな？」
「えぇ。あなたを信頼します。私は人の浅はかさを知っている。人の汚さも知っている。でもね、人を信じるって事の意味も私は知っているつもりよ」
その言葉に俺も笑みを返して立ち上がる。
その皇ってヤツとは気が合いそうだ……そんな事を考えながら。
「五日以内よ。五日以内に、この命に代えても皇をこの地へと送ってみせる。神杜駅で待っていて」
「五日間、仲間達とずっと駅を張ってる」
――レンも帰ってくるのを期待している。
そう言いたかったけれど、その言葉はなんとか飲み込んだ。
その言葉はきっと蛇足でしかなく、命を懸けると言った彼女にとって、信頼の証にはなり得ないだろうから。

「私では――私達では、変わっていく故郷を守るには力が足りなかった。でもね、私達は諦めないって事の意味を忘れてはいないわ」
「俺は自分の汚さを知った。弱さも知った。でもこんな俺でも、信頼に応える方法ぐらいは知ってるつもりさ」

その手を取った俺の手を、一際強くギュッと握ってから、レンはゆっくりとその白い手を離した。
途端にその浴衣の先に覗くその足元から、ゆっくりと水鏡に映る境像のごとく姿を霞ませていく。
初めて能力の一端を見せてくれたのは……信頼の証だろうか。完全にその姿を消失させた彼女を見送ってから、そんな事を考えると少しだけこそばゆい。

「信じるって事の意味と諦めないって事の意味、か」

俺は本当に何をやっていたんだろうな。そう考えると情けなさ過ぎて笑えない。
『ノーフェイト』。
運命を殺す事しか出来ない――未来を刈り取るしか出来ないモノを『能力』で造るぐらいなら、他にも出来た事はあっただろうに。

俺はとても弱い変種だし、一人じゃなんにも出来ないヤツだけれど、珍しい力――俺だけの世界を持っている。
その力にどんな意味があるのか、俺には一体何が出来るのか……それをまずは考えるべきなんだろう。
頼るんじゃない。縋るワケでもない。しっかりと『使う』事を考えなければならない。
まずは俺が『ノルンズアート』を持つ意味、俺が力を持ってしまった意味を、しっかりと認識する事から始めよう。

「……それもレンに話せば分かったのかもな」

そう小さく独りごちてから、愛用の携帯を取り出した。
あやふやで曖昧だった今までの俺でも、信頼してくれた仲間達へと連絡を取る為に。
俺と似ていると言われた始祖の一角と出会う為の方法を、仲間達と話し合う為に。

2・祇園精舎の鐘の声二（後書き）

お気付きでしょうが、サブタイは平家物語からです。
これをサブタイにした理由も近々出ます。
終わりまで行けばマークも終わり、平家の興亡にアカツキの終世までを連ねる形で書いていくだけで、特にストーリーに平家物語との関係ありません。
終世まで書けたらいいな、心が折れないかな、やる気が折れなきゃいいな、と願いながら書いております。
見直しもやっておりますが、やはり一人では気づかない点もあるかも。
ご指摘お願い致します。随時直していく予定です。

さて、本文について。
雪代さん、ちょろっとだけ出ましたね。彼女はお気に入りだったのですが、書いている内にレンさんに心変わりしかけていたりします。特に設定していた口癖……『何々を知っているけれど、何々の意味も知っているつもりよ』のような分も出せましたし。
アカツキはもとから好きなキャラクターでしたけど、レンは書いていて株が急上昇した人です。
彼女にも注目して頂けたら幸いです。
次はまた再来週かな、一週間交代なんて法則はないんですけどね。
まだ雪代さんの本格的なお目見えはありません。回想も後少し続きますしね。
スズカはどうしよう。設定のどこまで書いて、どこを飛ばすべきかが分からない。何年分も全部は書けないし。
スズカもノクターン本編じゃ好きなんですけどね。上位三人に入るぐらいに。
依怙贔屓したら物語が狂いそうだから、少し考えもって書いていき

ます。

ではノクターン本編共々、ついでにアンクロも共々、よろしくお願い致します。

3・祇園精舎の鐘の声三

「くそったれ！　くそっ、くそっ！　なんだよ、なんなんだよ！　あいつらはっ！」

ひとしきりモノに当たり散らし、足元に転がっていたゴミ箱代わりのアルミ缶を蹴り飛ばす。

「あのカルト野郎共っ！　よりにもよって今日からじゃなくてもいいだろうがっ！」

室内に乾いた音を上げ、べっこり大きくへこんだそれに、さらにもう一回蹴りを入れる。

それでもなお苛立ちは収まらず、さらに毒づきながら衝動のままにコンクリートの壁へと思いっきり拳を叩きつけた。

……痛い。

ヤワな俺の拳はあっさりと壁の強度に負けるけれど、その痛みでなんとか冷静さを取り戻し、今すべき事へと思考をシフトする。

四日間にも及ぶ駅の張り込みによる睡眠不足と、待ちに待っていたファーストコンタクトを邪魔された怒りを、なんとか脳内のダストシュートへと放り込みながら。

――現在、この神杜という土地には、変種の在り方を巡る三つの

勢力がある。
一つ目はＳＳとも揶揄される『特警』、『関西特別治安維持警備局』だ。
これは神杜市庁と県庁の共同で発足された組織であり、変種の中でも強い力を持つ者を市や県で囲い、問題を起こした変種や、それを庇った人物の取り締まりに当たらせる為に発足した組織である。
この組織こそが権力による擁立という背景から見ても、最も大きな力を持った組織だと言えるだろう。
この大不況の中で、差別される側の変種達に国が立場と職を約束してくれるのだ。当然構成員も優秀な連中が集まっているし、何より局員全てが自分の立場を守る為に必死な辺りが強みだと言える。
しかしこの特警にはまだ規範というモノがあるし、何より構成員達も自分達が変種であるという意識と、自分達の為に他の変種を取り締まるという罪悪感からか、無差別な弾圧じみた真似はしてこない。
それが『特警は対応が甘い』と叩かれがちな理由でもあるが、もしこれが無差別な弾圧を繰り返すような組織体制だったのなら、特警の敵に回る変種達も確実に増えていただろう。そしてその分治安も悪化していたに違いない。
のらりくらりと市民の批判をかわしつつも実績を重ね、世論に左右されまくりな県庁からの要請をも適当にあしらう女性市長は、女傑と言うに相応しいやり手だと言えるし、特警の本部長は関西でも指折りの力を持つ変種だ。
この神杜ほど治安のいい街が近隣にないという背景には、この特警の本部があるという点が大きい。
この特警という組織とは相反する部分も多々あるけど、構成員の中には知り合いも何人かいるし、その在り方には俺も一目置いているのだ。
しかし、第二勢力である『聖祖真教』の連中は、この特警などよ

りも遥かに厄介で、比べ物にならないぐらいにタチが悪いヤツらの集まりだったりする。
聖祖真教とは、元は一地方都市に生まれた小さなカルト宗教集団で、今の変種と既存種の争いを中心に置いた教えを背景に、今現在その勢力を増していっている新興宗教団体だ。
人の祖としての既存種を、変種よりも完全に上位へとおいた教えを盲信する、現代の狂信者共である。
関東で起こった変種による動乱で揺れている関西を、さらに激しく揺さぶってくれる連中なのだ。
特警が『治安維持』を念頭に置いた集団だとするならば、この聖祖の連中の目的……主張は『原点回帰』。
つまり変種という、近年まで存在していなかった種を排除し、今まで通りの既存種による社会を作ろう、という事らしい。

まさに失笑モノだ。
この時代……今のこの瞬間も、どこかで既存種から変種が生まれているであろう時代に、どこまで愚かで後ろ向きな主張をしているのだろう。
そんなに古くからある事が大切だと思っているなら——能力や人格を抜きにして、単に祖である事を第一の教えとするのならば、精々原人の骨でも奉って隅っこにでもいてくれればいいのに、このでしゃばり共はそのイカレた頭に見合わないだけの力を持っていたりする辺りが最悪だと言えよう。
つまりこの聖祖真教の連中には、既存種の中でも富裕層や政財界に古くから携わってきた家が関わっており、なかなかの勢力を持っていたりするのだ。
関西の政治家の間でも、『特警派』と『聖祖教派』に別れ、火花を飛ばしているというのが現状なのである。

そしてこの二勢力に続くのが、『無銘』と呼ばれる変種と既存種の関係を対等に置いた、新たな社会を模索する集団である。
まぁ実際はそんなに大したモノなどではなく、冤罪で特警に捕まりかけた連中や、聖祖の連中に迫害された連中が集まっただけの寄せ集め集団でしかない。
そう、社会からあぶれてしまった――混迷する時代に迷ってしまった俺達こそが、名前も持たず、ただがむしゃらに前へと進む『名無し共』だ。

レンの言っていた『皇』を、俺達が迎える準備は万端だった。俺なりに打てる全ての手を打ったつもりだったのだ。
約束の期限である今日は、既存種だけで組んだ数名ずつのチームがいくつも駅近くに張り込み、少し離れた辺りには万が一に備えて強い能力を持つ仲間達が警戒にあたっていた。
ツテと金を使って特警の連中の目を反らしたし、集めた金や仲間内からの援助で得た資材も、その為に盛大にバラまいた。
レンならば、特警や聖祖の連中に気づかれるようなヘマをしてはいないだろう。
俺がそれを崩すワケにもいかない。
だから出来うる限りの手は打ち、出来うるだけの警戒はしてきたつもりだった。

『あたしはちっとバイトが入ってるからさ』

仲間内で一番頼りになる雪代が『バイト』で忙しく、時々しか参加出来ない点が多少気がかりではあったけれど、それでも彼女ならば何かあったなら『飛んできてくれる』だろう。
そう自分を納得させて、出来うる限りの手を打っておいたのだ。

……もちろん正直なところでは、バイトどころじゃないと言ってやりたいのは山々だった。
だけど、それを口にするワケにはいかない理由があるのだ。
正直な話、雪代ほど希少で特殊な能力があったならば、こんな不況の中で普通にバイトなどしなくても食い扶持に困る事はない。
彼女は、無銘に多くいる『単にちょっとした能力があるだけの弱い変種』ではないのだから。
雪代雅（ゆきしろみやび）……無銘が誇る最大戦力である『ソードメイカー』の能力は、物質形成能力とその形成した物質を自在に操る念動力を併合したような非常に特殊なモノなのだ。
それはもう『物質支配能力』と言ってもいい。自らの意志一つで物質を自在に結合させて形成するだけではなく、その形成した物質を完全に支配下へと置く能力なのだから。
確かにその能力にも制限はある。一度に形成出来る数も一定の範囲内だし、支配下……つまり意識下から外した物質は、その形を保ってはいられず、簡単に崩れてしまう。
しかし、それを差し引いて考えても間違いなく希少で、使い方によっては強大な戦力になりえるモノだと言えよう。
その能力が知れ渡れば、アングラな組織は彼女に破格の好待遇を約束してくれるであろうし、変種にとって一番の優良職である特警にだって簡単に入れるだろう。
研究機関関係だって、大枚をはたいて彼女を雇い入れたいという連中はいくらでもいると思う。
それでも雪代が俺達と共にいてくれるのは、『無銘』が彼女が求める彼女らしい生活に干渉しないからだ。
普通にバイトで生活をして、そこで稼いだ金でたまに仲間とバカ騒ぎをする……力があるからこそ叶わないそんな望み、そんな平凡を受け入れられるモノが、現代では俺達ぐらいしかいないからだ。
それが分かっているからこそ、喉元まで這い上がってきた言葉を

なんとかこらえ、何かあった際は応援を頼む事を伝えるに留めたのである。

もちろん雪代の件以外にも不安がなかったワケではない。
その最たる理由が第二勢力である『聖祖』の連中である。
この俺でも、あの連中にだけはなかなか渡りを付けられないのだ。変種を排除する事を目的とするあの連中は、ちょっと過敏に過ぎるぐらいに情報の出入り口が狭い。
関東から広がった混迷の余波を受け、動きが活性化してきたあの連中がどう動くか。それが一番の憂慮だったワケであるが、結果としてその憂慮は的を射ていたと言える。
もちろんその憂慮ゆえに、俺自身もずっと駅の正面口を張っていたのだが、結果としてそれもあまり功を奏さなかった。運と間が悪かったと言ってもいい。
そこまで準備してきたというのにあの気違い共は、ちょうど俺が食事休憩の為に場所を外した瞬間に行動を起こしたのだから。
しかもヤツらは、関東から逃れてきた人々が乗る東からの電車を、今日この日から差し止めようとしてきたのだ。
たかだか時勢に味方され、勢力を増しただけのカルト集団のクセに、数を頼みにレールと駅を塞ぎ、乗っていた人々を勝手に検閲しているらしいと、特警にいる知り合いから話が回ってきた瞬間、思考が一瞬完全にストップしてしまった。

「すぐに仲間達を集められるだけ集めてくれ。俺も直接出る」

その情報提供に感謝しつつ、なんとか平静を保ったまま通話を終えるだけでも一苦労だった。
そしてひとしきりあの気違い共を罵って、部屋をメチャクチャにした後、すぐさま携帯で仲間達に指示を飛ばす。
さっき食事休憩で交代してもらったばかりではあったが、そこに

文句を付けても仕方がない。
空きっ腹を簡易携帯食と栄養ドリンクで黙らせながら、濃紺のニットキャップとグラスの大きいサングラスを身につけ、愛用の原付へと跨った。
今にも止まりそうなアイドリングと、角張った古臭いデザイン。そこに俺とそう変わらないだけの齢を感じさせるその愛機は、今日は珍しくご機嫌らしく、一発でエンジンに火が入った。
太く鈍い今にも止まりそうな音を立てながらもなんとか起動するそんな愛機に、喝を入れるように軽く拳を当ててからアクセルを吹かす。
仲間達はもう乗り換えるべきだと言うし、俺もたまにそう思ったりもするのだが、何故かこいつに対する愛着がなかなか捨てられないのだから仕方がない。

『いますぐにでも燃え尽きて、消えてしまいそうだから流星号って感じ？』

そう雪代にもからかわれていたりするのだが
『上手い事言うな、こいつ……』
と言われた自分自身が感心してしまった辺りが、ひょっとしたら救いがないのかもしれない。

そんな雪代命名の流星号に跨って、駅に向かってひた走る。
ひっきりなしに回ってくる連絡、提供される情報に頭がぐるぐると回りそうだ。
気持ちばかりが焦ってしまい、思わずアクセルを握る手に力が入ってしまう。
首に引っかけただけの半ヘルが風を受け、紐が首に軽く食い込むのを感じながら、片手でサイト『ＡＫＡＴＳＵＫＩ』へと携帯からアクセスする。

目的は一つ。うちの虎の子とも言える連中、数少ない実戦的な能力を持った仲間達へのＳＯＳ。
もし、聖祖の連中が強硬な手段を取って、関東から逃れてきた人々の中にもいるであろう変種達を傷つけようとしたのなら、こちらとしても黙っているワケにはいかない。
数でも経済力でも、そして政治力や発言力ですらも、あのカルト野郎共に負けてはいるが、そんな理由で引き下がれるぐらいなら、最初っから俺達は聖祖を向こうに回すような真似はしない。

「頼むから、これ以上余計な真似はしてくれるなよ……」

しかし俺が最も危惧している事は、堕ちてくる元新皇に聖祖の連中が手を出してしまわないかという事だ。
レンの従う新皇を聖祖のアホ共が殺してしまわないか、などと危惧しているワケではない。あの連中にそんな義理など欠片もない。
むしろあいつらは、一回ぐらい痛い目にあってみた方がいいと思うぐらいだ。
だけどそれにも限度がある。ちょっとヤツらを小突くぐらいなら全然推奨するが、『辺り一帯を巻き込んでしまう』となれば話は違ってくる。

そうなれば、彼の存在を隠し通す事は難しくなる。
いや、はっきり言って不可能になるだろう。
『東より堕ちてくる最初の混沌の一人』
……その存在が公になってしまえば、今は三竦みで小康を保っている情勢に火が着きかねない。
着きかねないどころか、十中八九火が着いてしまうであろうし、その火も小火程度では済まないだろう。
関西の地は、不満がくすぶる変種達によって掲げられた新皇を中心に、次なる革命の烽火にさらされるに違いない。

そこに新皇自身の意志があるかどうかは問題ではないのだ。
『新皇が中心に立った』という風聞だけで、そこら中に潜んでいるであろう不満分子達が雲霞のごとく集まってくるだろう。
それは新皇という存在は皇というよりも、むしろ『力の象徴』として認識されている部分が大きいからだ。もっと正確に言えば、今は不満分子を抑えつけている特警をも超える力だと認識されているから……である。

そうなってしまえばもう収集は付かない。不満分子達が一つにまとまれば、それだけでも一大勢力であるのに、新皇までがついてくるからだ。
レンが言うには、今はなんとか力の衝動と諦観に狂った変種達の皇ではなく、人としての理性があるらしい彼ももう保たないだろう。
彼はこの神杜という街と関西という地に失望し、この壊れゆく国に絶望してしまうかもしれない。
そして人の浅はかさと壊れてしまった現実に、諦めを覚えてしまうかもしれない。
そうなってしまえば、この国の未来は塗り潰されてしまう。
なにしろ新皇達は、不況下ではあったが全盛期でもあったこの国の中心都市を、その変種としても異常な力であっさりと落としたような連中なのだ。
最終防衛ラインを敷かれた議事堂前で、守備側であった国軍のほとんど全てと、歴史ある議事堂そのものが連中に壊滅させられた事件はいまだ記憶に新しい。
レンが従う『彼』がそれをやったのかは分からないが、『彼』にもそれぐらいなら出来ると考えるべきだ。
それほどの力を持つ新たなる種の皇が、絶望のままに最初に壊す街……それがこの神杜市となる。
壊れゆく未来への置き石、この先へと道を繋ぐ『切り札』となるハズだった存在が、現在に終止符を打つ事になるのである。

つまり希望が絶望に変わる。そういう事だ。

「くそっ、くそったれ共！　俺がようやく掴んだ希望の種を、その歪んだ狂信で刈り取るなよ、人をちょっとした違いで分けて考えるような汚さで汚すなよ！」

最後の希望が、最後の絶望に変わるかもしれない。

そんな焦燥感が、年代物の原付を限界以上の速さで走らせる。

力の弱い俺。たった一つしか取り柄がなく、自らの力で守りたいモノを守れない俺。

そんな俺が出来る事はと言えば、純正型として生まれた自身の立場と、純正型としての俺が持つたった一つきりの力に、狂ってしまわない事を示す事だけだと思ってきた。

それが現状に苦しむ全ての同朋達の道標になるだなんて、そんな大それた事を考えていたワケじゃない。

たった一人でも共感してくれればいい。そいつも俺と同じように考えてくれれば最高だ。

俺に出来ない事はそいつがやってくれるだろう。代わりにそいつが出来ない事は俺がやればいい。

俺はその皇ってヤツとそんな関係を築けたら、とそう考えていたのだ。そんな関係になるにはどうすればいいか、そんな事をああでもないこうでもないと、会う前から考えてきたのである。

自分自身で戦う力を持たない俺は、それ以外のモノを賭ける。命や尊厳、誇りや知恵の全てを懸けて、力を持つ苦しみに喘ぐ彼を救ってやろう。

力で失ってしまった居場所を作ってやろう。

その居場所を作る為に必要な力（モノ）は、俺の『たった一つ』で創る事が出来る。

――純正型としての俺が持つ、たった一つきりの力……『物質にあらざる力を付与する力』で。

それを使って求めたモノが、あの『未来を壊すノーフェイト』とは違った力。

誰かを殺す為に全てをかける……そんな似合わない事を考えて作ったアレとは違う、どこまでも甘ちゃんな俺らしい力だ。

その俺らしい力を付与された物質を使う為に、賭けるべきモノももう決まっている。

俺が力を付与した物質を使うには、それに見合うだけのペイ（代価）が必要なのだ。そのペイに見合うモノは、俺が覚悟を示す為にも元皇である男と対等である為にも、たった一つしか思い浮かばなかった。

その覚悟を四日かけてようやく決めたというのに。

「俺の相棒になるヤツに手を出すなよ。そいつは俺の相棒になるんだ。俺が作ったモノを守る為には絶対に必要なヤツなんだよ！」

新皇。まだ見ぬこの国最初の革命家。レンから話を聞いて思いを馳せた存在。

そんな男に対する俺の思いを嘲笑うかのように、運命は流転し、そして収束していく。

散々引っ掻き回し、弄んだ上で、運命なんてクソくらえだと罵った俺に、まるでその存在を知らしめるかのように。

そう、まるで出会うべき場所で出会えず失意に落ちる事ですらも、劇的を演じる為の脚本であったかのように、俺はあいつと出会ったのである。

3・祇園精舎の鐘の声三（後書き）

もう最近は予約更新じゃ間に合わなくなってます。
今回もかなり苦戦しました。
あぁ、近々一週間休み入れて書き溜めすべきかな。
でもまだ三話ずつぐらいしか更新していないという、純然たる事実に気がひけます。

来週更新予定はノクターン二部です。よろしくお願い致します。

4・祇園精舎の鐘の声四

「はぁ、レンに会わす顔がねぇ……」

聖祖の連中、特警、そして無銘の俺達の思惑が交錯して、俺の予定は見事なまでに狂いを見せていた。

東からの電車を検閲し、止めてしまったバカ共は、止められた電車から飛び出して逃げた数人を追って、街のあちこちに散り、電車を確保していた連中は、緊急出動してきた特警に取り押さえられた。

つい先程まで素知らぬ顔をしていたその特警は、バカ共の行動につけ込んで、止められた電車の人間を保護する、という名目をかかげて動き始めたのだ。

これは今なお国軍の残存勢力と、革命軍が争っている東の状況を、少しでも知る為の情報源を求めての事らしい。なにしろ関東の情勢は、見事なまでに情報を封鎖され、洩れでる情報はと言えば、真偽の分からないモノばかりなのだ。

『血迷ったバカから国民を保護する』という名目を武器に、不利な情報が洩れる事を恐れる、国の上の連中を黙らせるつもりなのだろう。あの女傑市長ならば、その程度の名目さえあれば、ゴリ押しで押し通してしまう。

「おかげでこっちの苦労は一切合切零からのスタートだっての」

逃げ出した数人の中に彼がいたのか、それとも『保護』された連中の中にいたのかは分からない。仮に『保護』された連中の中にい

たとしたら、手の出しようもない。
逃げ出した連中は、仲間達に行方を追わせているが、聖祖と特警にも追われているのだ。
正直な話、人員や情報収集力などでは、その二つにかなわない。例え、彼が逃げ出した人間の中にいたとしても、一番不利な立場にあるのは、間違いなく俺達無銘だろう。
それが分かるからこそ、憂鬱な溜め息が止まらない。俺にこちらでの事を任せてくれた女性を思えば、情けなさが身を切るような思いだった。

色々と指示を出し終えた後、俺は拠点の一つとして保有するボロいビルの屋上にいた。
特にその場所に意味などはない。連絡が付く拠点であれば……そしてネットワーク環境が整っていれば別にどこでも良かった。
そこが単純に駅からそこそこ近く、なおかつ特警の警戒網からはギリギリ外れていたという理由でしかない。
そこで細々とした工作や、仲間達への指示を出していたのだが、それもあらかた終わり、後は状況の流れ次第となった段で、パソコンの前に座っているだけの現状にも飽きてしまったのだ。
そこで頭を少し休める為に、わざわざ屋上に出て空を見上げていたのだ。
周りにあるビルから見ても一番低い屋上。そこは一番空から遠い場所でありながらも、視界に広がる空はレンズで切り取ったかのような蒼天で。
拠点を置いておきながらも、今まで気付いていなかったその穴場スポットに、少しだけ得した気分になる。
膿んでいた脳が、少しだけ透けるような蒼に浄化されたようなそんな感覚に軽く浸っていた時、今までコールする事はあっても鳴る

事のなかった携帯へと連絡が入ったのだ。
メールはバイブに設定してあるのだから、必然的に電話だという事になる。
表示された名前を確認し、通話ボタンを押す前に少しだけ耳との距離を考える。
そこに表示された『クロネコ』は、声がやや高く、耳に痛みを覚えるほどの声量で話すヤツだったからだ。

『ハーイ、あっちゃん。こちらクロちゃん。お久ぁ』
「はいよ、こちらあっちゃん。久しぶりだな、クロ」

別に久しぶりでもなんでもない。単にクロネコ独特の調子にペースを合わせただけだ。

「んで、どうした？　面白い話のネタでもあったか？」
『ん～、ネタっていうのかな。さっきまで駅のゴタゴタを見に行ってたヤツから聞いたんだけどね、止められた電車の中にいた何人かが、聖祖の連中が築いていたバリケードを越えてったのを見たらしいのよ』
「そうかい。なんかゴタゴタがあったのは聞いてるよ」

このクロネコ、れっきとした俺達の仲間の一人である。このいかにも興味のない他人を装った言い方は、単に携帯という媒介を使っている事に対して、警戒しているからに他ならない。
携帯は固定電話などとは比較にならないほど、簡単に盗聴が出来るし、情報が山ほど盗める媒介なのだ。
だからウチでの情報のやり取りは、特製のサイトを通じた方法か、こういった装った会話がメインとなる。弱小勢力なりの涙ぐましいまでの情報漏洩予防措置だ。

『その内の一人なんだけどさ、すんごい運動神経してたヤツがいたらしいのよ。山のように積まれたバリケードをモノともせずに乗り越えたかと思ったら、あっという間に得物を持った連中をすり抜けて、一宮の方に逃げてったんだってさ』
「一宮って……俺がいるの一宮だし」
『へぇ～、クロは今神杜の駅前なんだけどさ、なぁんか電車止めちゃった関係で特警がごちゃごちゃ言ってて、身動き取れないんだよね。単に遊びに来ただけだってのにさ』

なるほど。クロと他の神杜駅に張り付けていた連中全員は、今は身動きが出来ない状況らしい。確かに下手に動いて、特警に睨まれるワケにはいかない。

ここまでの会話でかなり状況が掴めた。
まずかなり高い身体能力を持った変種が一人、封鎖を受ける前に逃げ出したという事。
他にも何人かいたらしいが、その一人が特にクロネコの目に止まったらしいという事。
そいつが一宮方面に向かった事を、クロネコはどういった経緯かは分からないが把握した事。
最後に駅前に配置したメンツは、現在身動きを封じられているという事。

「そりゃ災難だったな。まぁ最近は、危ないヤツとかも結構うろついてるし、俺もちょっと周りに気を回してみるわ」
『ん、今日は特警の連中が引いてくまでクロ達は帰れないけどさ、また今度どっかにご飯でも行こうよ』
「分かったよ、また電話してくれ」

本当に雑談混じりに……雑談のような会話だけを交わして、電話

を切る。耳にはクロネコの掠るような高い声の余韻が残り、それを飛ばすように小さく頭を振る。
俺が――純正型の俺が直接見たならば、より確実に『彼』が誰だか分かっただろう。だけど、クロネコの報告ならば確信まではいかなくとも、なかなかに信用が置けると思う。
なにしろクロネコという男は、まさに野生の山猫並みに危機感知能力が高いのだ。つまりそれは相手の能力を把握する能力に長けている、という事でもある。
それが彼の変種としての『能力』なワケではないのだが、その一点においては変種固有の能力並みに信用が置ける。
彼が何かを感じた相手ならば、絶対に何らかの理由があるハズなのだ。

――ここは雅に派手に動いてもらうしかないな。

そう考えて、彼女に対する指令をサイト越しに送る。

『一宮付近にいる特警を、出来るだけ惹きつけて欲しい。やり方は任せる』

それだけの指令でしかないが、彼女ならば俺の期待以上に役割を果たしてくれるだろう。今現在、ウチのジョーカーでもある彼女には、それだけの力がある。
……まぁ多少、俺の想像を越えた規模で、街のあちこちに色々な被害が出るかもしれないが。

そして続けて、今はあちこちに散っている仲間達にも、一宮以外に駐在する特警の部隊に対する陽動と、電車を止めるという暴挙に出た聖祖の連中に対する抗議行動を指示しようとして――

そこで俺は気付いた。
街を見下ろすには低すぎる屋上の縁に座る俺の下、狭い路地に座り込む少年に。
黒髪をより映えさせる、暗い空気を纏い、憂鬱げな嘆息を漏らす存在に。
片手に掲げた缶コーヒーを軽く振りながら、そっと空を見上げていた男に。

――ビルの影、狭い路地裏、普通の学生服を着込んだだけの同族に。

一目見てすぐさま分かった。
容姿は想像していたよりも幼さを残していたが、それでも確信が持てた。
『写真は規制に引っかかるし、向こうの仲間達に迷惑をかけてもいけないから持ち出せなかったけれど、一目で分かるハズよ』
そう言って、レンは簡単な特徴しか教えてくれなかったのに、分かってしまったのだ。

――この少年が『皇』なんだ、と。

聖祖のバカ共のムチャと、特警の連中の横槍によって狂ってしまったハズの計画。
ここに俺がいたのも、今の状況では一番使い勝手が良かっただけだ。
その後に入ったクロネコの報告を聞いて、まだ俺達にもツキはある……そう思ってはいたが、俺が休憩をしている最中にこうして出会えるなど、単なる偶然による巡り合わせにしてはツキ過ぎてる。
よりにもよって今日聖祖の連中が行動を起こしたのも、今の関西

という地の状況を、関東から来たばかりの彼に教える為だったのではないか。
特警が横槍を入れたのも、それを補足する為なのではないか。
それにより俺がこの拠点に来る事になったのも、複雑化した指令内容によって溜まっていた疲れが出てしまい、風のよく当たる屋上での小休憩を選んだのも、今この時の為なのではないか。
クロネコがこのタイミングで連絡をしてきたのも、俺が屋上にいる時間を伸ばす為だったのではないか。

そして初めて訪れたハズのこの場所が、不思議なほどに気に入ってしまったのは、今この瞬間を予感していたからではないか。

そんな考えが一気に頭の中を駆け巡る。

俺は運命なんてモノは信じない。そんなモノに価値なんてありえない。
時間と行動とちょっとした偶然が、必然に結びついただけの結果であり、足掻いてもがいていくら頑張っても無駄だった場合に、『これも運命だったんだ』と言い訳に使うぐらいの価値しかその言葉には見いだせない。
今も時間と行動と偶然に味方された結果でしかないのだろう。

それでも、今だけはそれを身近に感じられるような気がした。
身近なモノだと思ってもいい気がしたのだ。
それと同時に、彼がこの街に来てしまった以上、この関西という地も……この街も、やがては暗い未来に飲み込まれてしまうのだろう。
俺達も動き出さずにはいられないのだろう。そう思ってしまう。
すでに覚悟はしていた事なのに、胸の奥をキュッと締め付けられ

るような感覚を覚える。

「やっぱりこの街も壊れっちまうんだな……」

用意していた最初の言葉とは違った。もっと気の利いた言葉を使うつもりだった。

その言葉にだるそうに顔を上げ、俺の事を気にも止めていないような瞳で見つめる彼に、まっすぐと視線をぶつける。

暗い漆黒の闇を思わせるような瞳に。

鈍く輝く絶望色のその視線に。

それを見返しながら、ただ締め付けるような感覚を残す胸の痛みと、今の……そう陳腐な言い方をするならば、『運命的な出会い』に際して浮かんだ言葉を、飾る事なく口にしていく。

「もう、この街が――この国が壊れっちまうのは止められないみたいだ」

４・祇園精舎の鐘の声四（後書き）

これで回想編っぽい出会い部分は終わりです。
最初の言葉はノクターン本編のかなり前の方にもありました。
そこからの交渉シーンについては、同じくノクターンの一部後半にあります。

そしていよいよ、本編が始まります。まぁまだ前段階なんですけど。
本格活動はもうちょっと先ですね。アカツキとシャクナゲが交渉したり、黒鉄の基盤を作る為に奔走したり、あの人が本格登場したり、関東から妹襲来したり……。

つまりは今後ともよろしくって事です。
次回『諸行無常の響きあり』。

5・諸行無常の響きあり一

『皇という存在がどんなヤツを指すか知っているか？』

そう彼は尋ねてきた。

俺が抑制器を造り、それを手渡す為に顔を合わせた時に。

その口調自体は、何の意味もない問いかけのようであり、単なる話のきっかけでしかないようにも思える。

『単に一番強い力を持つ変種達のリーダー、異常な世界を持つだけの純正型、なんてその程度の認識なんだとしたら……それは大きな間違いだよ。腹立たしいほどに甘ったれた勘違いだ』

やはり不安があるのだろう、信頼が足りないのだろう……そう考えそうになって、その考えが浅はかだった事を思い知らされる。

何故なら目の前の彼には不安など見えなかったから。

あったのは、造り上げた《抑制器》に対するほんの一握りにも満たない期待感と、それを圧倒する諦めにも似た思い。

『一番人間から外れたモノ、まっさらな地獄も、真っ黒な悪夢も知っていて、狂気の安逸さに染まりゆく《世界》を知っている者。そして本来なら唾棄されるべきなのに、今の世の中では賞賛されてしまった殺戮者――それが《皇》さ』

どこまでも深みから見上げてくるかのような、深い暗黒を思わせるその黒瞳。
高みを見上げ、見上げ続けて、それだけで諦めてしまった敗北者のようなその表情。

『俺のやってきた事は、向こうじゃもはや法に問われるような罪じゃない。そんな現状でもない。仲間達には賛美すらされてきた。でもその罪は――この魂には刻み込まれている』

絶望に形はない。
悪夢に色はない。
そんなモノに形などあるワケがない。
それでももし形を成したモノがあるとすれば――
それはきっと人の形をしているのだろう。
目の前で茫洋と座る男を見ながら、俺はそんな事を考えていた。

『俺は純正型にも皇にも――汚れた英雄や、賞賛される人殺しにもなりたくなんてなかったんだけどな』

――『シャクナゲ』。
二つ目の力ある器物はそう名付けた。
皇が適合者だから、あるいは皇の為に造られたモノだから、という意味でそう名付けたワケではない。
『威厳』の花言葉にあやかったのは、単に彼が俺には尊いモノのように思えたからだ。

壊れてしまった環境と、狂ってしまった仲間達に囲まれながらも、最後の一線で壊れきってしまわなかったアイツが、俺には侵しがたい存在に思えて仕方なかっただけでしかない。

『純正型の世界を食って空圧弾を放つ』――そんな力を抑える為の武器。武器の在り方としては、どこまでも本末転倒な、武器だとはとても呼べない器物。

人を圧倒し、国を凌駕し、今までの世界を屈服させるだけの力を、単なる『無尽蔵な弾丸を放つだけの能力』へと変えてしまう抑制器。

それを『威厳』の銘で捧げたのは、そんな感傷があっただけだ。俺が望む人としての尊厳の意地を、垣間見た気がしたからに過ぎない。

普通の人間ならば、そんな自分が持つ力を抑える為のモノなど手に取らないだろう。

俺自身が力を与えた器物ではあれど、余りにも無意味で、武器としては滑稽な在り方をしたソレ。制作者である俺でさえ、そんなモノが例え使えたとしても、自分自身が使う気にはとてもなれない。

俺には『力』が必要で、絶対に不可欠で、手放すワケにはいかないのだから。

それでも『ソレ』を手にした彼は狂喜した。歓喜を露わにしてみせた。

その武器としては異常なモノへと、不信感を隠さずに……それでもほんの僅かな期待感を隠しきれずに手を伸ばし、純正型の皇たる証とも言える世界が発露しない事を確認すると、そこで彼は喜びを爆発させた。

出会って以来無気力で、話し合いをしている最中もどこか遠くを見ていて、俺の力を見せても無表情を崩さなかったアイツが、無骨なそれを手にした瞬間間違いなく驚愕し、ゆっくりと喜びを溢れさ

せていったのだ。
俺の純正型としての世界の粋を込めて作った異常な器物を、彼はまるで宝物のように胸に抱いていた。
暗い安堵を滲ませる表情で。
まるで自分の匂いを、世界を刻み込み、そこに閉じ込めるかのように。
もう出てこないように、封じ込めるかのように。

「……シャクナゲ。俺自身が封じられた、もう一人の俺」

彼が何を思ったのか、誰の事を考えたのか。それは分からない。分かりようがない。
顔を歪め、泣きそうな嗤いを浮かべながら、虚ろに呟きを漏らす。
『シャクナゲ』。
彼が縋るように胸に抱くそれは、武器としてはどこまでも間違った在り方を持った銃。俺が作った二つ目の『力ある器物』の銘。
そこに彼は全てを封じ込めて……抑えつけ、押し付けて、代わりに『シャクナゲ』の名前をアイツは得た。
名乗る名前を捨て、今までの過去から目を背け、世界を封じて、それら全ての代わりに『名前だけ』を得たのだ。

――威厳、荘厳の銘を持つ花の名前を。
そこに込められた一種の憧れにも思いは、恐らく届いてはいないのだろうけれど。

『世界』、あるいは『領域』。その呼び名はエリアやテリトリーでも構わない。

純正型の純正型たる証にして、最上の異常である証。
彼がそれを『抑えつける事』、『完璧に封じ込めてしまいたい』と望んでいる事は、レンからすでに聞かされていた。

元々は純正型としての世界を使えなかった男。
単に身体能力が高かっただけの少年。
彼が世界を認知し、理解し、使役した瞬間から、周りの環境は激変したのだという。

純正型の世界を長らく認知していなかったという事自体は、別にそう有り得ない話ではない。
俺は生まれてすぐ……自我が芽生えた瞬間から、自分の世界を認識し、扱う事が出来たけれど、知り合いの純正型は、俺と知り合うまで……つまり俺の世界に触れ、純正型の世界を認識するまで、自らの世界を展開出来なかったのだ。
それを俺も知っていたから、そういう事も有り得るのかもしれないと思う。俺にとっては世界という力自体、すでに身体に宿った感覚と同等に扱えるモノではあるが、それも個人差があるのだろう。
でも俺も知り合いも、二人共自らが純正型である事だけは認識していた。
俺にはこの『瞳』に証があり、知り合いには『手の甲』に証があったからだ。

しかし彼には、身体的な証がなかった。俺も抑制器を造る為の調査と偽って、念の為に確認はさせてもらったが、どこにも証らしきモノは見当たらなかったのだ。
ほとんどの純正型は持っているであろう、身体に刻まれた純正型の証。俺自身も彼と出会うまでは、『純正型には身体のどこかに証があるモノだ』と思っていたぐらいだ。
それがなかった以上、自分を純正型だと思わなくても無理はない。

現に周りの仲間達も、誰も彼が純正型であるなどとは思わなかったらしい。
そんな彼が純正型になった瞬間……純正型である事を示した時から、彼の仲間達が歪み始めたのだという。
レン自身は当時の事をよく知らず、詳しく説明してはくれなかったから、それが彼の思い込みなのか、はたまた事実なのかは分からない。確実に言える事は、強大な力を持つ純正型がその瞬間に誕生した、という事だけらしい。
そう、彼が発露した世界はまさしく異常過ぎるモノで、非常識過ぎるモノ。俺とて簡単な概要を聞いただけで、その異常さに自ら耳と今まで培ってきた常識を疑ったぐらいだ。

『誰にでも認識できる世界』。
『いかな純正型とはいえ、個人が構築出来る世界としては、広大過ぎる領域を持つ世界』。

通常は『同じ純正型にしか認識出来ない領域』が、純正型以外にも見えるという時点で異常だといえた。
それだけではなく、指先だけにしか発生しない俺の世界はおろか、どんな純正型をも圧倒しうるほどの広大な世界を、彼は支配する領域として生み出せるらしい。
見た事はないし、想像すらもつかないぐらいではあるが、見渡す限りに広がる異界が、彼の純正型としての世界（力）であるらしいのだ。

そんな少年が、やがて純正型を含めた新たなる人間達の皇となり、始祖と呼ばれ始め、やがて新皇となった。
他の皇達よりも特異な世界を持つ彼のみが……純正型以外にも認識出来る異界を生む彼だけが、新皇として表に立つ事になったのだ。

――今までの人類を超えた人種を、象徴する存在として。
どこまでも異種であり、果てしなく超越種である事を、その『目に見える異界の力を持って』知らしめる皇として。

それまでは純正型だと認識すらしていなかった少年が、純正型としても異常な力を持つ純正型――つまり純正型の皇として祭り上げられる……それがどれほど彼を圧迫したか。生まれ付きそうあった俺には想像もつかない。
自分自身は無力な存在である俺に、分かるハズもない。

喜んだのか、悲しんだのか。
笑ったのか、泣いたのか。
嬉しかったのか、苦しんだのか。
絶望したのか、それとも――。

ただ力を持った事で変わってしまったモノは、やはりあったのだろう。
それ故に……元々はなかった世界故に、『こんな力さえなければ』と思ってしまったとしても、分からなくはない。
しかも彼は、その世界の理――純正型固有の世界が持つ、個々で特性がある世界特有の力を、確実に制御しきれてはいないという事も、彼が自らの世界を忌み嫌う理由の一端となっているのだろう。

純正型とてやはり人間であり、人間がそれまでの歴史で培ってきた倫理観、道徳、常識、法則に縛られている部分はある。
それだけに今までの常識には当てはまらない『世界』の在り方は、受け入れられない者もやはりいるのだろう。
そんな受け入れられないモノを、完璧に制御しきれる道理がない。
純正型固有の世界は、あくまでもそれ自体が別の理を含んだ異界であり、どこまで行っても現実世界とは異なった法則を持つ領域な

のだ。その異界という認識があればあるほど、自らの世界と反発してしまうのかもしれない。

これは邪推にも似た推測でしかないが、彼の場合は十代前半まで『自らの世界を知覚出来なかった』という事が、世界を制御しきれていない要因なのではないだろうか。

長い間現実世界のみを知覚し、自分の中にある世界を認識出来ていなかったからこそ、彼は『現実世界の理に縛られている』のではないか。

それが彼自身の純正型としての世界の理とぶつかり合い、制御に支障を来しているのでは……と俺は考えている。

もちろんそんな事を考えてみても、どうにもならない事ではあるのだけれど。

何はともあれ、彼は世界を抑える一つを手にした代わりに、俺達『無銘』の活動に協力してくれる事となった。

理を抑える『器物』は、より複雑な固有のモノを抑える力を――あるいは奪う力を付与しなければならないから、それなりに時間がかかるのだけれど、『世界』を抑えてみせただけでも十分信頼するに値したのだろう。

正直な話、一つっきりの抑制器でも、世界と理の全てを――力の源全てを奪うだけの『繋がり』を付与したつもりだった。

力を繋がりとして与えて、代わりに『無限の弾丸』を吐き出す結果が残るハズだったのだ。

そうならなかったのは、やはり彼の『世界』の異常さと強大さによるモノなんだと思う。つまり彼の力は、一つだけの抑制器では抑えきれなかったのだろう。

世界の発露……つまり力の根源は抑えきれても、そこから漏れだす理の欠片は抑えきれないのだ。だからこそ二つを持って全てを抑える事とした。

そしてこれは俺個人の考えによるモノでしかないが、その二つ目にはより厳重な封印を施す為に、『繋がりを解消する為の条件』を付与しようと考えている。制御の甘いらしい世界が、彼の意志とは関係なく発露するのを抑える為に。

そこまで付与しようと考えれば……その上今まで試みた事がない条件を付与しようとすれば、やはり相応の時間がかかってしまうのである。

彼、『シャクナゲ』は、全てを闇の中に封じる事を条件に――そして俺が『皇たる力を彼に望まない』事を条件に、俺の仲間になってくれた。そして俺も、『制御の効かない皇としての力』など、必要ないと考えている。

その点は間違いなく共通の認識であり、だからこそ今はまだ未完成な世界を完璧に抑えてしまうべきなのだと思う。

そう、彼自身が未完成の世界と、皇の呪縛を抑えきれるその時まで。

彼がはっきりとその力と過去に向かい合えるその時まで。

そしてようやく、俺達の物語が始まっていく。未来への布石の中でも鬼札とも言える存在を得て。

今はまだ、親友どころか顔見知りでしかなく、どこまでもギブ＆テイクの関係でしかない。それですらも最大限の譲歩として、彼は俺の方へと歩み寄ってくれた。

しかし、そこからようやく始まっていくのだ。

始めに比良野悠莉という名前を封じ込めて。代わりに俺の本名を

彼の中に封じ込めて。
今後はお互いに名前を封じ込めあって。
それは意味のない、単なる子供の遊びにも似た秘密の共有。共感を得る為だけに持った共有するモノ。
最初の架け橋。これからに期待する為の一歩。

ほとんどの仲間達には『関東で革命軍や、変種に対して不当な弾圧を行う国軍に抗っていた、レジスタンスのメンバーだった少年』とだけ伝えて。
『レジスタンス』という言葉が、ベタベタに固めた嘘の中でも、やや大袈裟過ぎるきらいはあったけれど。
それでもしっかりと周りを嘘で塗り固めきって、どこまでも強固で薄っぺらな壁を作ってしまった。
そう、俺達はこの日から共犯者となった。
最初はまず、ギブ&テイクで結ばれた『共犯者』という立場になろうと考えてはいたけれど、一つの『歪な運命』を造り上げる事によって、ようやくその立場を得る事が出来たのだ。
彼の苦悩と過去を抑え込み、それを知った上で皇を迎え入れ、その存在を匿った俺の罪と、皇としての存在そのモノを忘れようとする彼の罪を、お互いの胸の中にだけ封じ込め合う共犯者に。

アカツキという名前と、シャクナゲという名前だけを持った、真っ黒な絆で結ばれた共犯者に。

まぁ、ここまでも大概苦労させられてはきたのだけれど、この共犯者たる男は、そこから先も散々と苦労をかけてくれた。
東と西の環境の違いや、レンにあらかじめ聞いていた話からある程度は想像をしていたけれど、そんな想像を遥かに越え、予想して

いたよりもずっと手のかかる相手だったのだ。
正直それは誤算だったし、俺の考えの甘さが身に染みた。

昼間はまだ関西に来たばかりだという事で、療養を兼ねてこっちの環境に慣れてもらう事にしたけれど、彼は日がな一日座り込んで全く動かない。

父親に連絡を入れ、ほとぼりが冷めるまで……彼がこちらに来た時に起こった、聖祖の列車差し止め事件と、それにちょっかいをかけて、油揚げ（美味しい所）だけ狙った特警とのゴタゴタが落ち着くまで……身を隠すという連絡をして以来、彼は日がな一日ぼんやりと天井を見て過ごしていた。

『シャクナゲ』を抱いて、ただ呆然と遠くを見るようにしているだけだったのだ。

夜になれば夜になったで、毎日毎夜大声でうなされて、間近の部屋を住居としていた俺は、その声で毎回起こされるハメになる。そしてたまに心配になりその様子を見にいけば、今にも泣きそうで、死んでしまいそうな顔をして、部屋の隅で震えているのだ。

ヒドい時など、無意識にうなされている悪夢からの解放を願ったのか、『抑えきれていない力』がむちゃくちゃに暴れ回り、住処にしていたビルの部屋を穴あきにしてしまう事すらあった。慌てて飛び起き、茫然自失の彼をひっつかんで、騒ぎになる前に夜逃げのごとく廃ビルを後にした事も二回や三回じゃない。

幸い……と言っていいのかどうかは、今の経済状況からすれば分からないけれど、拠点に出来そうな廃墟には困らない。だが、週二ペースで夜逃げじみた真似をしていては、拠点のストックが尽きるのが先か、俺の体力が尽きるのが先かという問題にもなってくる。

多少時期尚早な感はあるが、仕方ないから簡単な仕事でも頼んで、頭を切り替えさせようかとも考えたが、その案も結局は話を持ちかけただけで諦めた。

『……恩は返す。約束は守る。お前が守りたいモノの為に、俺は最初に誰を殺せばいい？』

用件を言う前にそう聞かれてしまって。

彼はまだ壊れきっていないだけで――最後の一線を越えてはいないだけで、その一線の直上に、危ういバランスで立っているんだと分からされてしまって。

正直どうしたモノか扱いに困る鬼札だった。親友にも相棒にもまだなれていない弱みが、一歩踏み込む事を躊躇わせる。

そんな自分にイライラさせられ、ストレスにより疲労が募るという負のスパイラルが嫌すぎる。

そこで寝不足と日々の活動による消耗により、俺が寝込んでしまう前に、一つの賭けに出る事にしたのだ。

――剣匠の呼び名で知られるウチの最大戦力であり、彼の本当の正体を知る数少ない仲間の一人でもある少女……雪代雅に彼の面倒を一任する事に。

ソードメイカーであり、トラブルメイカーでもあり、なおかつ《無銘》一のスキャンダルメイカーでもあるのに、その能力だけで荒事方面のリーダー格でもある彼女に、彼の矯正を依頼する事にしたのである。

彼女の能力ならば、力を半分以下に抑えた彼が暴走してもなんとか鎮められるだろう……そう考えて。

浅はか過ぎるほど短絡的にそう考えて。

多分、寝不足と過労とストレスとで頭がいい具合に湯だっていたんだと思う。

トラブルメイカーとトラブルの源を一緒くたに置くという愚考に、

当時はなんの疑問も抱かなかったのだから。
依頼した雪代が彼を起こしにきた時になって、体中の血の気が盛大に引いてしまったが、全くもって俺の浅はかによる自業自得であり、手遅れももいいところだった。
何しろ彼女は一度引き受けた仕事や、面白そうだと思った事柄からは絶対に手を引いてはくれないのだから。

まぁ、彼女には『雪代に任せておけば大丈夫』と思わせる雰囲気があるヤツだというのも、俺が安易な考えに走った理由の一端なのだろうけれど、それでも絶対に『一任』はすべきではなかった。任せきってしまうべきではなかったのだ。

なにしろアイツは真性の『トラブルメイカー』でありながらも、どこまでも生真面目で妥協しない……妥協を知らないようなヤツなのだから。

6・諸行無常の響きあり二

祇園精舎の鐘の声
諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色
盛者必衰の理をあらわす
おごれる人も久しからず
ただ春の世の夢のごとし
たけき者も遂には滅びぬ
偏に風の前の塵に同じ……

謳うように告げるその言葉は、想像を創造し、運命を付加する為の合い言葉だった。
それ自体に意味はなく、言葉において力を発揮するワケでもない。
単に新たなる『在り方』を持った存在が生まれる事を、粛々と宣

言する言葉に過ぎず、その存在の歪さを宣誓するモノに過ぎない。
暁のごとく昇り、やがては沈んでいく定めにある自身（人間）と、自分が消えても残るであろう『それ（運命の造物）』を比較し、自らが消えても残るモノがあると信じる為のモノが、その栄枯盛衰を唄った詩であるだけだ。
俺はそうして『運命毒の杖』を産み、『威厳の銃』を一つ産んだ。
それらが今後の壊れゆく未来において、必要不可欠な要素（スパイス）になる事を信じて。
力を持たない想像者――創造者である自分に出来る最大限の事だと信じて。

昔っから出来が良く、力も生まれ持ち、それを制御しきれていた代わりに、『運命』じみたモノにはとことん嫌われてきた俺に出来る、『最悪な運命』ってヤツに対する最大にして最高な嫌がらせ。
今まで身近にあった『不運な定め』ってヤツに対しての、最悪にして最低の禁じ手。
『与える世界』の力を使い、物の在り方を歪める俺だけの反則技。

栄枯盛衰。
今が最低なら……もうすぐ最低な時代が来る事が見えているなら、いつか最高な時が来る為の架け橋を想像する。俺が創造してみせる。

――俺は運命ってヤツを信じない。認めない。
そんなモノに狂わされる未来なんて……進化なんて、心底胸くそ悪い。虫唾が走る。クソ喰らえだ。反吐が出る。
だから抗って、抗って、抗って、抗い続けてやると決めた。

そう、運命って言葉をもし使う時が来るとすれば、それは出来うる事の全てをやり切っても諦めざるを得なかった時か……全てをやり切ってそれを誇れる時だけしかない。

つまり『これも運命だったんだ』とどうしようもなかった過去を呪う時か、『運命なんてやっぱ大した事ないな』と変えられた道を嘲笑う時だけ。
それだけで十分で、それ以外の時には必要のない言葉だと決めた。
俺はそう決めて、『アカツキ』になったのだ。

「起っきろ――――――――――――っ！！」

大声一喝と言ってもまだ全然生温い、絶叫よりもなお響く叫びで俺は叩き起こされた。
といっても、すぐ間近で発された声じゃなかっただけまだマシだっただろう。その声は隣の部屋――二日前から寝食をしている、廃棄ビルたる拠点２３の隣室から聞こえてきたのだ。

――あぁ、雪代が来たのか。
隣の部屋のヤツも可哀想に。
起き抜けの耳元であの甲高い声に喚かれたなら、鼓膜どころか心臓が不整脈で破けるかもしれない。
はて？　隣と言えば誰が今はいたっけかな。頭が上手く回らない。
やっぱり少しは休まなきゃダメだな。力がないんだから、口と知恵と能力で勝負するしかないのに、肝心要の頭がいざという時に回らなくなったらお話にならない。
そういや、雪代には何か頼んだ事があったような……。最近の疲労原因たるアイツに関して何か――。
朝一の大声によって寝台から転げ落ちた態勢のまま、そこまで考

えたところで、体にまとわりついていた毛布をはねのけて起き上がる。

――ヤバい、非常にヤバいっ！　何を考えて昨日の俺は雪代に頼み事なんかしたんだろう！？

確かに雪代ならば、いざという時に頼りにはなる。俺よりずっと強い彼女なら、いざ問題が起きた時にも力ずくで抑えこめるだろう。それは間違いない。

しかし、その『いざという時』や『問題』を起こす原因にもなりかねないのが、雪代雅という少女だった。いっそ『問題を起こす事を前提』に置いておいた方がいいぐらいだろう。それも間違いないのだ。

確かに丸三日間寝ていなかった上、二日前と三日前には二日連続で夜逃げ紛いの真似をさせられ、体力も気力も尽きかけていた。むしろ尽き果てていたと言ってもいい。

眠気を超えてハイになった先で微睡みを覚え、それをなんとか切り払ったら気だるさに体が重くなり、テンションが底抜けに下がった後で最初にリピートするという状態も、この三日間で何回体験したかも分からない。

ただ起き続けていただけではなく、絶えず頭か体を動かし続けていたのだ。よく倒れなかったと自分を誉めてやりたい。

でも、その湯だった脳みそだったからこそ、無銘が誇る『鬼札』と『切り札』――『トラブルの源』と『トラブル拡散器』を一緒にする、という愚考に至ったのだとしたら、この三日間の頑張りぐらいじゃ全く見合わない。

「ゆ、雪代！　ちょっと待てっ！」

そこまで考えがまとまると、俺は慌てて部屋を飛び出していく。

隣の部屋で寝起きしていたアイツ……鬼札である『シャクナゲ』を『救い出す』為に。

「ありゃ？　なんでアカツキが隣にいんの？　同棲？」
「一緒の拠点で寝起きしてるだけだよっ！　つかせめて同居って言えっ……て、そうじゃなくてっ」
「んっ？」

部屋を出て、扉が開け放たれたままの隣の部屋へと駆け込んでいけば、そこにはいつもの『制服』を着込んだ雪代が、目を白黒させて声も出ない（首が締まって出せないのかもしれない）、シャクナゲの襟をひっつかんでブンブンと揺さぶっていた。
思いっきり遠慮も会釈も恥じらいすらもなく、寝転んでいた彼に跨るマウントポジションで。
シャクナゲの周りの空間が、ユラユラと揺らめいているのは、『あの鎖』が顔を出そうとしているのかもしれない。
まぁ、俺が入ってきた段階で雪代が俺の仲間である事が分かったのか、その揺らめきは揺らめきのまま力を発露しなかったが。

「ん、あっ、おはよう……？」
「はい、おはよ……でもなくてな」
「まだこんにちはじゃない……と思うんだけど？」

はて？　と首を傾げながらも、その細く白い手首に巻かれた腕時計を見やる。

……なんであの細腕であんな馬鹿力が出るんだろう？

そんな今更な事を思いながらも、漏れ出る溜め息と共に肩をガックリと落としてしまう。

――雪代雅。
無銘が誇る生粋の戦闘能力者であり、名前だけは幹部でもあり、俺の古くからの顔馴染みでもある少女。
『剣匠（ソードメイカー）』とも『剣騎兵（ブレードライダー）』とも呼ばれるほどの能力の持ち主。
その肩書きからは想像もつかないが、こいつのルックスは間違いなく最上級だと言えるだろう。古くからの付き合いである俺から見てもそうなのだから、見た目が整ったヤツが多い変種の中でも、群を抜いていると言ってもいい。
ツーサイドアップにまとめた肩下まである栗色の髪と、くりくりとした夜空色の瞳は愛らしい。低くも高くもない身長なのだけど、姿勢が非常にいいからか実際よりも高くスマートに見える。
顔立ちは美人というよりも可愛らしいタイプだけれど、その左目の縁にある泣き黒子や、僅かに吊り目がちな瞳によって、メイクによっては非常に化けるクチと言えるだろう。
しかしその性格は、外見を大きく裏切ったモノを持っていたりする。

そう、バイト先の制服でもある『メイド服』と『カチューシャ』を身に着けたまま、危険極まりないと思われているハズの『皇』の部屋に、躊躇いなく上がりこめる豪胆さを持つ程度には。
会話をしている最中も、起き抜けの『元皇』の腰に跨ったまま、その襟元を持ってガンガン揺らしまくる程度には。
「いや、挨拶はいいよ。つか服装からして今日はバイトか？　だったら俺の言ってた頼み事の方はいいから、バイトに行ってこいよ」
そして、頭が膿んでいた頃に頼んだ頼み事を、冷静になって考えてみればやっぱり取り下げたいなぁ……と思うぐらいには。

「あ、気にしなくてもいいよ。こいつも連れてくから」
「……はっ？」
「いやぁ、ウチのバイト先ってさぁ、ロクなヤツが裏方には入って来ないから助かっちゃうにゃ～♪」

雪代はメイド服を着た女性が給仕をしてくれる喫茶店……いわゆる『メイド喫茶』ぽい店でバイトをしている。この不景気な世情ながらもなかなかに羽振りがいいのは、そのルックスから売れっ子である事と同時に、用心棒みたいな役割もこなしているからだ。
しかし、そのバイト先とシャクナゲがどう繋がるのかが、俺には全く分からずに首を傾げてしまう。

「ちょい前に入ったヤツなんてメイド好きのストーカー野郎だよ？
確かにウチはそういう制服を着る喫茶店だけどさ、裏方は裏方で徹してくんなきゃにゃ～。いやぁ、アレはヤバいくらいキモかったわ！　まぁあたしを付け回したのが運の尽き、ボッコボコにした上で簀巻きにして、首から『ストーカー野郎につき反省中』のプラカードぶら下げて、駅前に晒したら来なくなったんだけどさ」
「……あ、あぁ、そりゃ災難だったな……でもなくてな」

確かにその『男』は災難だったけど、そんな些事よりも聞き逃せない事を聞いた気がする。

「そんなワケで人手が足りないのよ。だから、こいつ借りてくね？
まぁミヤビさんに任せときなさい。一端の裏方に……じゃなかった、戦力に鍛え上げてやるからさ♪」

すでに揺さぶられ過ぎて、目を覚ました後再び意識を飛ばしたらしいシャクナゲを、雪代はバンバンと叩いてみせながら、俺に向かってグッと親指を立てサムズアップしてみせる。

「いや、とりあえずは俺の話を聞く所から始めてみよ……」
「あぁ～っと、ヤバいヤバいっ。バイト遅れるっ！　仕方ない、寝坊助な『これ』は担いでいくかっ」

仮にも『新たなる人類の皇』とまで呼ばれた少年を、その立場を知っていながらも『これ』呼ばわりするのは、日本広しと言えどウチの雪代雅だけだろう……そんな事を考えて呆然とする俺を背に、雪代は気を失ったシャクナゲを器用に一人で担ぐと、躊躇う事なく部屋の窓を開けて飛び降りる。
いかに人を背負っているとは言え、アイツがこの程度の高さ……三階から飛び降りたぐらいでどうにかなるワケもない。

「よっ、はっ、とっ♪」

案の定、窓の外に『浮かせたままだったらしい』数本の剣を足場に、器用に地面に降り立つと、慌てて（誘拐されたシャクナゲを案じて）窓から身を乗り出した俺に、ブンブン手を振ってから駆け出していく。
残されたままの砂剣が、あっさりと還元され風に舞う様を眺め、人を背負っているとは思えないダッシュを見せる雪代を見送り、今日も晴れやかな青空を見上げる。

――今日もいい天気だな。
クソ野郎。

「聞けっつってんだろっ！　あのトラブルメイカー――――っ！」

慌てて後を追おうと思い、自分の部屋へと取って返したのだけれど、間の悪い事にその後立て続けに入った情報に時間を取られてしまい、気付けば昼を幾ばくか越える時間帯まで、俺は部屋から動く事が出来なかった。

ちょっとした雑務や定時連絡程度ならば後に回しただろう。しかし、事が現在の関東やその他地方の情勢についてとなれば、後に回してしまう事も出来ない。

そう、情報は鮮度が命なのだ。価値の高い内に金銭や今後への糧に変え、あらゆる事態に備えて目を通しておく必要がある。

その発信先にも思わず笑みが浮かんでしまう。

未だに抵抗する国軍を片手間に相手取りながら、北陸、東北、中部へと無差別に侵攻を開始していた革命軍が、その進軍を止めたという情報は、『彼女』――シャクナゲの側近であり、顔見知りであり、同志でもあるレンから届けられたのだ。

元国軍の女性将校にして現北陸の革命家である『長尾』、中部で活動を開始したらしい『新羅』、数多くの変種グループが存在する東北地方の情報と共に、現在の各勢力の情勢をデータとして送ってくれたのである。

少し前、政府の要請により、首都圏への援護に向かった北陸の地方基地所属だった長尾は、迎撃に出た『灰色』の軍勢に敗北を喫したらしい。それ以後、北陸地方は関東革命軍の『白銀』の軍勢に攻勢をかけられていたようだ。

しかし、その白銀の勢力は現在勝手に行軍を停止し、各勢力に対して不干渉を貫いているという。それを機に、長尾は自らに同調す

る師団を率いて、国軍とはきっぱり決別し、独自の勢力を築き始めているらしい。
白銀と長尾の間になんらかの取引があったのか、それとも白銀の方に行軍を辞めざるを得ない理由があったのか。そこまでは記されておらず、その意図は読めてこない。

中部の新羅は、いまはまだ活動を開始したばかりで、その地盤も安定しておらず、関東の革命軍に従う形で地元の国軍と戦っていたらしい。だが、それを援助していた関東の勢力が帰還してしまい、現在の中部地方は泥沼化した激戦があちこちで繰り広げられ、混迷を極めているとの事だ。
その中に関東革命軍と国軍に対抗する為に、北陸の長尾が侵攻を開始し、現在は転進したまま関東に帰還していない『白銀』と長尾、新羅と国軍の四勢力の睨み合いに徹しているらしい。
今のこの国は、東に行けば行くほど命の値段が下がっているみたいだ。中でも、あらかた革命軍側が掌握してしまった関東地方などより、地域一帯が別々の勢力に握られている中部地方の方が、よほど地獄に近い場所らしい。

東北は東北で抜けた存在がいない為か、はたまた勢力が多数ある為か、それとも東北の国軍が首都圏である関東に援護に向かい、そのまま帰ってこなかったが為か、頭を抑えられるモノも敵対勢力もいない代わりに、各グループ同士の小競り合いが絶えないそうだ。
関東革命軍に奪われた南部を奪還すべく、各勢力で人数を集めているらしいが、結局足並みの揃わない有象無象の寄り合いに過ぎず、敗北を喫するだろうと言うのがレンの推測だ。

関西に隣接する東海三県では、三県で合議した結果からか、関東に援護を出さないとした代わりに、ひとまずは混乱らしきモノも起こっていないらしい。

とりあえずは県境での防衛に徹しているとの事だが、それでも東海地方だけが静かな背景には、何らかの理由があるのだろう。裏で関東革命軍となんらかのやり取りがあったのかもしれない。

それらの資料をつい時間と現状を忘れ読み漁り、新しい情報をランク分けし、繋がりがある特警に幾つかの情報を流す代わりに、見返りを手に入れる算段を整え……そこではっと我に返った頃には、すでに二時間近くが経ってしまっていたのだ。

シャクナゲがこちらに来て以来、ずっと彼女からの連絡を待っていただけに、つい夢中になってしまったのである。

もちろんそういった情勢に興味があり、惹かれていた事も否定は出来ないが。

「あぁ～、ヤバい、非常にヤバいっ」

出来れば雪代のバイト先には顔を出したくないのだけれど、そんな事を言っている余裕はない。

なにしろあの『剣匠』は、天上天下唯我独尊を地でいくようなヤツだ。元皇である鬼札を『これ』扱いし、なおかつバイト先であるメイド喫茶の、裏方に登用するようなヤツなのである。

ここで雪代とシャクナゲを放っておくワケにはいかない。

レンが関東でのゴタゴタの後も神杜に来ないのは、俺があいつのお守りをちゃんとしている、と信頼しているからこそだろう。

そして出来る限り多く情報を俺に流しておく事が、シャクナゲの居場所の安泰に繋がると考えているからに違いない。

そこだけを見ても、間違いなく彼女は有能な女性で、どこまでも有用な人物だろう。俺が必要としている事が何か理解した上で、自らの利用価値の高さをも証明してみせている。

そして彼女は自分のその利用価値を持って、自らが仕えている元

皇の価値までも高めているのだ。
神杜に未だ来ない事で信頼を示し、情報を送る事で彼女自身とシャクナゲの価値までも証明する……ここまで計算しているのなら、彼女は有能過ぎると言ってもいい。

それだけにもし、その期待を万が一にも裏切ったのなら、彼女は絶対に俺を許してはくれまい。
まぁ、そんな事になったのなら、俺自身が許せそうにないのだけど。

誰かを一度信頼したのなら、最後まで信頼し通す事。信頼されたのなら、それに全てを持って答える事。
それが今後の財産にもなると思っている。彼女ほどの人物からの『信頼』ならば、どれほどの付加価値がある事か。
それに比例して、大言壮語の末に信頼を裏切った代償はデカくなる。彼女を敵に回した時の損失は計り知れない。第一に、俺の安息の地はどこにもなくなるだろう。
結果的に関東で散ったであろう仲間達の想いごと、レンの信頼をも裏切ってしまったのなら、彼女は最悪の暗殺者と化して俺や仲間達に牙を剥くに違いない。
彼女の能力の本分は、恐らく正面きった戦闘などではなく、能力を用いた不正規戦……中でも『暗殺』にこそあると予測している。
俺に自身の力の一端を見せてくれたのは、信頼の証と共に『脅し』の意味もあったのだろう。
つまり『私の能力なら、誰も気付かないうちに……姿をも確認されないままにアナタの後ろに立てる』と言われたに等しい。
目の前で掻き消えるように姿を消した彼女なら、姿を晒さないまま後ろに立っていても分からないのは、自明の理だからだ。

そこまで考えれば人任せには出来ない。悪態を吐き、忙しい身な

がらも外出の準備を整えていくしかないのだ。

「……あぁそうだ、雪代に『お帰りなさいませ』だの『ご主人様』だの言われても、今度は笑わない覚悟だけは決めておかないとな。二度目となれば本気で殴られるだろうし」

そんな戯れ言を残し、いつものニット帽を目深にかぶると、薄い色のサングラスを手に取った。

そして、ビルの入り口に置かれている新聞数部が入ったビニール袋を手に、駐輪場へと向かう。

――情報は鮮度が命。新聞を読む時間も貴重なんだけどな。

流星号のキーをクルクルと回しながらも、そんな憂鬱すぎる繰り言を最後に残して。

6・諸行無常の響きあり二（後書き）

久しぶりのあとがきっぽいあとがき。Ｍａｒｋ版
ミヤビさんと小題の『平家物語』の意味が出てきました。
栄枯盛衰。平家物語については、各個人でお調べ下さいませ。
多分どこかしらに訳が載っているかと思います。

ミヤビさんの紹介については、もっと話が進んでからとなっております。
今回の話は、マーク時の地方の状況や、メインキャラクターの一人である『雪代雅』の御披露目が中心です。
メイド喫茶……行った事ないですから、テレビとかの情報とかないんですけどね。
見聞を広める為と、取材と割り切って行ってみようかとは思ったりもしますが、多分思うだけで行かないです。
近くにないですもん。
なので、メイド喫茶において必須の心得みたいなモノがありましたら、ぜひお教え下さい。

……なんでメイド喫茶で働いてる、なんて設定を付けたかと言うと、彼女の能力のイメージによります。
つまり『精製と操作』によって生まれた大剣に、ボードに乗るかのごとく乗ってみせるシーンをイメージして、『さて、どんなタイプの服装がインパクトがあるか』『ミヤビさんらしいか』を考えた結果……

『和装』はスイレンさんと被る。
スリットが深く入った『チャイナ』は、余りに扇情的過ぎてミヤビのイメージに合わない。しかも着る機会が当時は浮かばなかった（

中華街でバイトとか、これ書いてる最中に考えつきました）。
『ツナギ』は似合うだろうけど、カブトが着てる。
コートとかは比較的にありきたり。

……等々、紆余曲折を経てメイド服に。
見ようによっては十分扇情的なんですけどね、メイド服。
まぁ、ミヤビさんの背が高かったならチャイナにしたかも。カッコいい感じで。
で、いざ書いてみたら、メイド喫茶についての知識がないという事実に気がつきました、と。
あらかた設定出来た段階で変える訳にもいかず、メイドミヤビさんが誕生したのです。
メイド喫茶について慌てて検索してみても、いまいち要領が掴めず苦労しております。
だから素人（？）考えのイメージで書いている部分ばかりなので、変な箇所がありましても生暖かく見守って下さい。

では来週からはまた『ノクターン』で会いましょう。

7・諸行無常の響きあり三

「……あいつって不思議なヤツだな」

器用な手捌きでナイフを扱い、クルクルとジャガイモ回転させながら薄く皮を剥いていくエプロン姿の男は、そう言って小さく肩をすくめてみせた。

『小さな小料理屋の台所で』皮を剥いているのが、トラブルメーカーに寝起きから浚われた男……この国で起こった動乱の中心で、変種の皇の一角と目された男だという時点で、それはそれは余りにも摩訶不思議で、非常識過ぎる光景だと言える。

こんな光景を特警の連中に見せ、『こいつが関東の新皇です』と言ってみせても、『情報屋・暁もヤキが回ったか』と鼻で笑われてしまう事だろう。

「気が付いたら人混みの中で、しかもメイド服を着た女に背負われているって時点から、かなり特殊な一日の始まりだって言えるだろうけど――」

……嫌すぎる一日の始まりだ。

さぞかし視線を独占した事だろう。悪目立ちは困るんだけど、なんと言っていいかコメントにも困る。

「まさかメイド喫茶で店内を掃除させられた後、こんな小料理屋に

貸し出されて野菜の皮むきをさせられる、なんて思いもしなかったよ」

『良くいくお店が、手が足りないっていうから途中から貸し出した』

とはあいつに聞いていたけれど、まさか本当に貸し出されていて、黙々とジャガイモの皮むきをさせられている様を見る羽目になるとは思わなかった。

噂に聞く『新皇』のイメージからも、こっちに来てからのイメージ――夜、悪夢にうなされる度に、アジトを破壊しまくってくれたイメージからも、とことんかけ離れ過ぎている。

「悪かったな、雪代――あいつも悪いヤツじゃないんだけど、ちょっと変わったヤツでさ」

「ちょっと変わったヤツ、か。

……あれでちょっとなのか」

なかなか痛いトコを突いてくれるけれど、その口元には笑みが刻まれていた。

本当に小さく……口元を僅かに緩める程度だけれども、シャクナゲは確かに笑みを浮かべていたのだ。

それが俺に対して見せた初めての笑みで。

こっちに来てから初めて見せた表情で。

――やっぱり俺は、やり方を間違えていたんだと……そう理解させられる。

それをあの雪代に解らされた事が癪であり、それでもすごく納得も出来て。

俺も小さく笑みを漏らした。

大事にし過ぎる事が、決して人の為になるワケではないという当

たり前の事を、俺はこいつに対して接する時には忘れていたのだ。
こいつが皇だから。
俺じゃ想像も出来ない経験をしてきたから、と。

「夕飯はまかないが出るって聞いてるから、食べてから朝のビルに帰る」
「それだったら、俺もここで一緒してもいいだろ？　もちろん俺は客としてだから、席は確保しておくからさ」
「……好きにしろよ」

そう言って、またも皮むきに戻るシャクナゲに笑みを返し、こっそり雪代も誘っておいてやろうと計画して、ニヤリと口元を歪めてみせた。
多分雪代の遠慮のなさと、底抜けのポジティブさは、こいつにとっていい影響だろう……そんな事を考えて。

時刻は昼を過ぎ、すでに夕方に近くなっていた。こんな時間帯まで、俺がこいつと会えなかったのには理由がある。
もちろんそれは改めて言うまでもなく、あのトラブルメイカーの仕業であるが、今になって考えればあいつがこの時間まで引っ張っていたのにも、それなりの理由があるんじゃないかと思えた。
あいつはよく分からない考えを持っているけど、決して考えナシのバカではない。
俺なんかより、ずっとまともに考えられる頭がある。俺よりも柔軟で人を差別しない真っ直ぐさがある。
それを反省しつつ今後に生かす為に――同じ間違いを繰り返さない為にも、今日一日の事を振り返ってみる事にする。

「お帰りなさいませ……ってあんたか、ご主人様」
「仕事熱心なのか、そうじゃないのか、良く分からん出迎えご苦労さん」

喫茶『メイディ』。
何から何を助けて欲しいのか、あるいは五月の労働者の日を現しているのか、良く分からない店名のドアをくぐると、にっこり笑った栗色の髪を持つ女性が出迎えてくれた。
ツーサイドアップに整えられた髪を揺らしつつ、その表情は見事なまでの朗らかスマイル。
にっこり笑顔はそのままでも、それとなく口調には素を交えながら。
『ご主人様』という背中がかゆくなるような言葉を使いながらも、らしさも見えるその物言いは、件のトラブルメイカーによるモノだ。
服装は朝も見たそのままで、頭にはレースのついた独特のカチューシャと、右の一房に巻かれた白いリボンを装備し、小柄で愛くるしい仕草を包んだ、レースが無駄に付きまくったエプロンドレスが似合い過ぎている。
まぁ実物は、それらでしっかり『擬態した』栗毛の小悪魔、剣の群れでテロを行う、名前は雪代雅という猛獣であるけど。

「こんの誘拐女。あいつは一体どこだよ？　言っとくけどな、今回はさすがに笑って許せるような事じゃねぇぞ」

思わず『ご主人様呼ばわり』に背中をかきむしりたくはなったけれど、それはなんとか苦心の末に我慢して、うすら笑いに崩れそうな表情もどうにか引き締めると、目の前にいるエセメイドに向けて

そう告げる。

「お席の方へご案内致しますね♪」

「おい！」

「なんでしょう？

……仕事の邪魔したら蹴り出すかんね」

まぁ、俺が凄んでみせたぐらいでどうにかなる相手じゃないって事を、確認しただけで終わったのだが。

「ったく、あんたって暇なの？　実はこういう店好きだとか？　まさかとは思うけど、あたしを変な目で見てないよね？　にゃ～、そういう趣味に偏見はないけど、あんたの場合はどん引くわ、このクールぶったエセゴールドマン」

「……お前なんか大っ嫌いだよ、こんちくしょう」

「まぁまぁ、一応お客（カモ）だし、散々注文して売り上げに貢献だけはしていってよ」

「くそっ、この店に来るメイドさん好きは、絶対に現実を知るべきだ」

さりげなくカモ呼ばわりされてるし。

「あら、あたしって超絶可愛いメイドさんだと思うけどにゃ～。よく『ミヤちゃんがこの店で一番可愛いよね』って言われるもん」

「それは被りまくった猫の着ぐるみが可愛いだけであって、中身は別物だろうがよ」

そんな昔馴染み同士の心温まる会話を小声でかわしながらも、ファンシーな店内の一角へと案内される。

「着ぐるみが可愛いって事は認めてくれるんだにゃ～」
「着ぐるみ『だけ』はな」

席を引かれ、座った俺のそんな言葉を気にした様子もなく、雪代はニヤッと（ニコではない）笑うと、居住まいを正してから片手だけスカートの裾をちょこんと摘み、可憐にクルッと回ってみせる。

「……ご主人様。わたし、今日もご主人様専用の可愛いメイドさんでいられてますか？」
「ぶっ！？」

そしてそんな事を猫なで声で言うと、その大きな瞳をキラキラと潤ませつつ、上目遣いで見やってくる。
オプション装備として、計算され尽くしたかのような角度で傾げられた小首が小憎らしい。
なんというか、うん、メイド服による補正からか、一瞬だけクラッときてしまった事は否定しない。

「あっはははは♪　可愛くなかった？　結構ドキッとしたでしょ？　顔赤いしさ。にゃ～、あたしって罪な女の子だにゃ～」
「……地獄に落ちろ、エセメイドめ」

そんな調子のまま俺の向かいに平然と座る彼女に、思わず毒づくとそっと辺りを見渡す。
俺と同じく、先ほどの猫被りメイドにクラッと来たらしい客と、苦笑を浮かべる雪代の同僚達、そして何故かウットリ顔でサムズアップしてくるオーナー……通称マダム。
こんなノリでいいのかと他人事ながら心配なってくる。

「サボってていいのかよ？　まだバイト中だろ？」

「今からお昼取ろうと思ってたからさ、一緒していいっしょ？　話もあるしさ」
「俺はいいけど、自称店一の売れっ子さんが男と店内で普通に飯なんか食ってていいのかい？」

案内したまま座り込み、平然とメニューを見やる目の前のエセメイドには、チラチラとこっちを見やるお客が見えていないらしい。
しかし、誰も何も言ってこない事から考えれば、案外問題はないのかもしれない。

「あぁ、いいのいいの。あんただったらマダムも何も言わないし、あたしお昼は馴染みのお客さんと食べる事もあるから」
「なんていうか、すっごい緩いよな」
「そ？　あっ、あたしはナポリタンね。飲み物はレモンティーで。ここは当然あんたの奢りでしょ？」
「なんで奢りで当たり前な雰囲気が出来てんだよ」

しかも奢ってもいいか、と思ってしまっている辺り、こいつは天性の奢られ上手だろう。

「にゃ～、それが男の甲斐性ってやつさぁ」
「……男とか、女とか頭に付く言葉は嫌いなんだけどな」

大抵が男には不利で女は得する言葉な気がするし。

「ま、あいつ……あ～っと、比良野、じゃなかった、シャクナゲだっけ？　あれの事とか話したいしさ、これぐらい奢ってくれてもいいでしょ？」

――あんたがえらくご執心らしい男の事だし、あの騒動ん時はウ

チも一応手を貸したしさ。

そう言いつつも、通りかかった同僚に、平然と俺の分……彼女の好みでミックスピザとアイスコーヒー、極めつけにティラミスとチーズケーキまで注文を通し、軽い調子で肩をすくめてみせる。

当然俺のピザもちょこちょこ摘むつもりなのだろう。デザートは二つとも雪代が食う事は言わずもがなとして。

「あのな、確かにあの時、特警の目を逸らせとは頼んだけど、特警の車両を目についたはしから破壊しろとは言ってないぞっ！？」

「いや、目を引けるし、行動不能にもなるし、一石二鳥かなぁ～って思ってさぁ」

あっはっはっ、と雪代は至極軽快に笑って見せるけれど、付き合いの長さは伊達じゃない。その頬を流れる一筋の汗は見逃さない。

恐らく途中から特警に邪魔でもされたのだろう。当たり前だ、自分の所属する機関の車を破壊されて、黙って見ているワケもない。

それでこいつが熱くなっていった事は明らかだ。

『特警の車両を次々と破壊し、所属能力者数名を撃退して逃げ延びた変種』の情報は、最高ランクの報酬で情報を求められている。

まさか『俺の仲間です』とも言えないから、適当に流しつつ、『その変種』に対する手配の解除をお願いしたけれど。

正直な話、特警のトップとも目される知り合いには、その辺りでかなりの借りを作ってしまっただろう。神杜の女傑こと、神杜市長にも同様だ。

……嫌だなぁ。まぁたなんだかんだ言われて、代わりに『虎の子』の情報を提供しなきゃならないかもしれない。持ちつ持たれつとは言え、俺には落ち度なんかないのに。

……まぁ、慌ててた余り、雪代にやり方を一任した以外は。

「と、ともかくっ！　最近どうなのよ？　デイトレードは辞めたんだっけ？　資金集めは上手い事言ってんの？」

ジトっと半眼で見やる俺の視線に耐えきれなかったのか、はたまた単なる逆ギレか、いきなり雪代はそう話題を転換する。

一度しっかりと腰を据え、もっと深くまで突っ込んで会話をすべきかと悩んだけれど、取りあえずは後に回す事にした。

さっさと話を終わらせて、シャクナゲと合流を果たすべきだと思ったからだ。

「デイトレードはもうダメだ。ここまで景気がどん底で世界中が混乱していたら、期待出来るペイの割にリスクが高過ぎる。今は集めておいた資金で色々と買い溜めている段階だけど、物価の上昇が予想以上でな。手持ちが全然足りない」

「ウチも結構経営が厳しいらしいしねぇ」

「だろうな。でもここはまだマシだよ。この辺りにあった店も、ほとんどがとっくに店畳んでるんだから。俺も情報の切り売りでどうにかやっていってるけど、それでも最低限の資材が集められるかはギリギリなトコだ」

メイディと名付けられた喫茶店は、オーナーであるマダムが資産家であり、趣味で経営しているような店だからこそ、まだ気楽に経営していられるのだろう。

治安が悪化しても店員に『無銘』の核弾頭がいるし。

「あははっ。あたしもそろそろ日常にしがみついてはいられない、かな」

俺の言葉に、軽くそう言ってはみせるけれど、いつもの底抜けに明るい笑みじゃなく、陰を感じさせる笑みこそが雪代の心情を語っていた。

誰よりも日常を、平穏を愛しているのは、間違いなく目の前の少女だ。底抜けに笑って、毎日を明るく過ごしてはいても、俺みたいに『未来が壊れる事』を覚悟している人間などよりは、よほど今の現状を悲しんでいる事だろう。

そこでシャクナゲを――新皇だった彼を恨み、現在の混迷を身近にいる彼だけのせいにしてしまわない点だけを見ても、雪代の芯の強さは計り知れないと思う。

その心底は分からないけれど、これだけ明るく振る舞っていられるのは、彼女が間違いなく俺なんかより強いからだろう。

とっくに諦めて、最悪の未来に備えている俺などより、その最悪を思慮に入れて俺に協力しておきながらも、『現実(いま)』を楽しめているのだから。

「――悪いな。いざという時になっても、お前なら一人でそれなりに生きていけるんだろうけど……正直に言えば頼りにしてる。俺達の事は気にするな、なんて言えそうにない」

「いいよ、あたしが今みたいな日常を送ってこれたのはあんたのおかげだしね。その時が来たら、あたしもあんたの理想に乗っかってあげる」

「……悪い」

「謝んなよぉ。あたしは謝罪の言葉よか、お礼の言葉のが嬉しいにゃ～」

パタパタと手を振ってみせる雪代を見て、フッと軽く息を吐く。

――あぁ、なんか文句を言いにきたハズなのにな。

見事に思考を外れた位置に誘導されている気がする。しかも何故

か、俺の方が礼を言うべき立ち位置に立たされてる。さらに言うなら、それでも全く後味が悪くない。

「……ありがとう」

「ま、この雅さんに任せときなさい」

本当に雪代雅という少女は破天荒で、気持ちのいいヤツだと思う。

運ばれてきた俺の分であるハズのミックスピザまで、ほとんどペロリと食べてしまったその食いっぷりも含めて。

ちなみに6分割にされたピザの内、俺が食べたのはたった一切れだけで、後は皿ごと奪われてしまった件に関しては、一応文句を付けておいた。

まるっきり応えた様子はなく、食後にダージリンまで頼みやがってくれたけれど。

「んで？　なんだかんだと引き伸ばしてくれたけれど、そろそろいいだろ？　労働の対価をよこせ」

――その食後、何故か店で皿洗いを手伝わされ、続いて裏に積まれた荷物の整理までさせられた後、さらにおやつを奢らされたところでようやく休憩……そして本題へと入る。

まぁこの場合対価と言っても、誘拐犯に対しての身の代金に類似したモノではあったが、そこまでツッコむつもりはない。

優に三時間はこき使われたワケであるが、俺は勝てない勝負（口

喧嘩もガチンコの喧嘩も）を挑むほど、マゾな趣味は持っちゃいないのだ。

「あぁ、そろそろいっかな。あ、でもその前にさ」
「なんだよ、まだ何かやらせるつもりか？」
「ちゃうちゃう。でも、まだやりたいってんなら仕事回すけど？」
「遠慮しとく。で？」

促した俺の言葉に、雪代はチラッと休憩室の机の上にある灰皿へと視線を向ける。

「あんたってタバコ辞めたの？　ちょい前まで、あのキッツいタバコ吸ってたじゃん？
――ストレスが溜まってるから、これぐらいキツいヤツじゃなきゃ保たないんだぁ～、とかオッサンみたいな事言ってさ」

タバコ。確かに吸っていた。
そしてその話題も、いつかは出るだろうと思ってもいた。
平和を冠した銘柄。名前が気に入って吸い出したその銘柄の中でも一番キツいもの。それを吸わなくなった事を指摘したのは、彼女が初めてだった。
元より未成年の身であるし、立場上吸う時と場所は選んでいたからだ。
それを辞めた事を初めて指摘され、思わず息を呑んでしまう。
値段がバカみたいに上がったから禁煙をした、というありがちな理由じゃないからだ。
もっと別の理由があって……他の人は絶対に持たないであろうワケがあって、例え僅かであれ健康に気を使う必要があって……俺は辞める事にしたのだから。

「……辞めたよ。金がかかるし、いずれは手に入りにくくなるだろ？」
「似合わない事言っちゃってさ。あんたなら上手く買い占めて、裏で流したりとかしそうじゃん？」

なかなかに鋭い指摘に苦笑が浮かぶ。たしかに嗜好品の類は、税金と材料費の高騰でバカみたいに値段が上がる事が分かっていたから、色々と買い占めていたりするからだ。

タバコだけじゃなく、ボトルウィスキーから日本酒、紅茶にインスタントのコーヒーまで。あらゆるモノを『壊れゆく未来を予感した、ずっと子供の頃から』俺は買い溜めている。

いくら賞味期間が書かれたラベルを『偽造』しても、品質の関係から値を下げざるを得ないが、それでもかなりの利益が出るだろう。

「だからこそなおさら無駄には出来ないだろ？」

でも俺が愛用していたタバコを辞めたのは、そんな利益面を苦慮したからではない。

俺には新しい力が必要だった。

そしてそれを得る為には賭け金となる代償がいる。俺の世界は、代償なき力を与えてはくれない世界だから。

全てはその為。

必ず代償を持って――繋がりを身体や精神に強いて、在らざる力を与えてくれる世界なのだから。

その為に、僅かでも……一分一秒の寿命や、健康な細胞の一つであれ、代価（ペイ）となりうるモノは無駄には出来ない。

力無き存在なりに俺が戦う為には――どのような代償であれ覚悟しておかなくてはならない。

全てはその為。『ノーフェイト（運命にあらず）』を否定したが

為。
『ノーフェイト（あれ）』に半分持っていかれた俺が、精一杯の代価を用意する為。

今、俺が必要だと考えているモノ（ちから）は知識だ。そして情報だ。
その中でも最高峰（ハイエンド）たる『未来の知識』、『未来の情報』が得られれば言う事はない。
それすらも代償次第、考え方次第では与えてくれるのが俺の世界。器物に新たな運命を書き込む『付与の世界』だ。
しかし、未来を知る為には『未来』が必要となるだろう。俺の持つ『ノルンズ・アート』という能力は、そういった力なのだから。
与える能力に見合うモノが代償となる。存在そのものの在り方を変えるだけの代価が必要になるのだ。

「あんたもさ……ううん、あんたでもさ、これ以上捨てなきゃならないモノってあるんだね」

そこまで語るつもりはなくとも、古い付き合いだけに何かを感じ取ったのか、雪代はわずかに瞳を閉じてみせ

「うん、やっぱそうだよね」

そう深く頷いてみせる。
そして『よしっ』とばかりに気合いを入れて立ち上がると、ようやく本題へと入ってくれた。
その瞳からは、少しばっかり似合っていない陰みたいなものを感じさせるけれど、それでもなんとかいつも通りに笑ってみせながら。
「あいつ……シャクナゲはさ、行き着けの小料理屋さんに貸し出し

たんだよねぇ～、なんかそこのお婆ちゃんが腰を痛めちゃって、材料の下拵えとかが大変だって言うからさ」
「貸すなよ！？」

しんみりとした空気を潰す事が分かっていても、思わずツッコミを入れずにはいられなかった。
まぁ、暗い雰囲気は望むところじゃなかったのだけど、それを吹き飛ばしてみせたのは狙っての事ではないだろう。
雪代雅というヤツは、どこまでもそんな少女のままなのだと知っていたから。

「だって見たトコ手先は器用そうだったし、自炊してた事もあるって言ってたからさ」
「そういう問題じゃねぇっての！」
「あ、お給料はちゃんと出るからさ！　仲介料になんか奢ってよね」
「しかもさらにたかる気かよ！？」

そうしてなんとか誘拐された相棒希望の少年の居場所を、半日がかりで聞き出して
『明日もちゃんとバイトに行くように！』
という伝言まで頂いて、俺は小料理屋『トミコ』にようやく向かう事が出来たのだ。

「いってらっしゃいませ。ご主人様」

そんな背筋にミミズか何かが這うような錯覚を覚える、エセメイドに見送られながら。

7・諸行無常の響きあり三（後書き）

ご指摘頂きましたが、間違えて完結扱いにしておりました。
逆月は案外ヌケているので、たまにこういったポカをやらかします。
何かお気づきの際はぜひお知らせくださいませ。
もちろん、普通の感想等も大歓迎です。
『諸行無常の響きあり』などの後につく『一』などの数字は、単なる型番に近いモノなので、章によってまちまちです。祇園精舎の鐘の声は四まででしたが、今回は五くらいまでありそうです。
まだ書けてないんですけど。
次回はミヤビに拉致られたシャクナゲ視点の番外編を書こうかと思いますが、う～ん。
マークはアカツキ視点のみからなる、純粋な一人称と言ってただけに、番外編はナシかもしれません。
読んでみたいって方がいたら頑張ってみますし、自分なりに上手く書けたのなら番外編でいくかもしれませんが、次のアップまでに上手くまとまらなければ、今ほとんど書けてある『諸行無常の響きあり四』をいくと思います。
四にいっちゃうと、番外編がいまいち空気読めてない箇所に挟まりますしね。

今後ともよろしくお願い致します。

8・諸行無常の響きあり四

「あぁ～♪　お腹いっぱいっ」

少し先の夜道を、今にも鼻歌でも歌い出しそうな満足げな笑みを浮かべて雪代は歩いていた。俺の隣には、なにやらぶつくさと呟いているシャクナゲおり、その二人の温度差に充てられたのか思わず口からは嘆息が漏れ出る。

夕飯は、シャクナゲのバイト先……雪代曰わく、とみこさんの腰が治るまではバイトに駆り出されるらしい……で、俺と雪代、平山祐希と偽名を使っているシャクナゲの三人でとった。

念を入れて作った偽名が本名とよく似ているのは、いざ呼ばれた時に反応出来なくては意味がないからだ。呼ばれ慣れている……あいつの場合は『呼ばれ慣れていた』と過去形だけど、本名と似たような名前ならば、その名前に慣れるのも早いだろう。

そう考えた上での偽名である。

それはともかく、今夜の夕飯はバイト上がりの雪代と合流してから、賄いが出たシャクナゲに俺達が相席した形で取った。

賄いとはいえ、贅は尽くしてはいなくても手間暇と心を尽くした料理は旨そうで、本来ならば満足のいく食事であっただろうと思う。

しかし、当のシャクナゲは、不満そうな……納得がいっていなさそうな顔で、雪代の少し後ろを歩いていた。

もちろんその理由の一端には、
『これも～らいっ！』
と許可なくおかずを強奪していく雪代や
『この生姜焼きとサラダの胡瓜交換ねっ』
と、江戸時代末期の海外との不平等条約ですら真っ青な不等価交換を、向かいに座る女から強要された事もあるのだろうけれど、理由はそれだけではない。
むしろそれだけでは収まらなかった、というべきか。

「そりゃ人の奢りであれだけ遠慮なく飲み食いしてりゃ、腹もいっぱいだろうな」

つまりおかずを半分近く持っていかれた上に、奢りを強要されたのだ。
そう言いたくなる気持ちは、昼食の出来事を鑑みるまでもなく、しょっちゅうたかられている俺には非常によく分かった。
雪代はケチじゃないんだけれど……むしろ気前はいいぐらいなんだけれど、遠慮や躊躇というものが致命的に欠けている。奢る事にも奢られる事にも遠慮が全くないのだ。

そう、今の彼女は昼時に言っていたように、『仲介料』と称して思いっきりシャクナゲに晩飯をたかったが為にご機嫌なのであり、『不当な仲介料』として晩飯を奢らされたシャクナゲは、見かけよりもずっと食べる雪代に、かなりの出費を強いられてげんなりとしているワケである。
この細い体のどこにあれだけ入るのか。今日のバイト分は確実に雪代の胃袋に消えた事だろう。

「俺はまだ食いたりなかったんだけどな。胡瓜だけは何故かやたら

食った気がするけど」

雪代は胡瓜が苦手なのだ。ちなみに同じく苦手らしい椎茸は、俺の頼んだ天ぷら定食の幾つかとの不等価交換によって、俺の胃袋に収まっている。

「なぁんかイヤミな感じねぇ。人がせっかく歓迎会として、晩御飯を一緒にしてあげたのにさぁ」

「なんで俺の歓迎会で、俺がお前の分まで支払いしなきゃならないんだよ？」

「そこはそれ、男の甲斐性ってもんでしょ？」

「この場合、甲斐性とかそんなもんは関係ないと思うんだけどな」

その意見には全面的に同意見だ。

むしろ雪代は、『男の甲斐性』という言葉の意味をもっとよく知るべきだと思う。

「あぁ～もうっ！　男が細かい事をグチグチ言うなっ！」

「うぉっ！？　危ねっ、っていきなり顔面狙ってフルスイングとか、それこそ女の子としてどっか間違ってるだろっ！！」

「あっ、こらっ！　避けるなっ、生意気なっ！！」

「無茶苦茶言うなっ！」

まぁ、口に出して言ったりなどすれば、こんな風に鉄拳が飛んできそうだから言わないけれど。

……うん、まぁ、何はともあれ仲が良さそうで何よりだ。

そう思う事にして、俺は巻き込まれないように距離を取る。

二人に比べて身体能力の低い俺は、シャクナゲみたいにひょいひょいと雪代の癇癪をかわしたり出来ないし。

万が一巻き添えでクリーンヒットでも食らえば、綺麗に意識を飛ばしてしまうだろうし。
さすがの雪代も、癇癪で『剣軍』を作り出して攻撃したりはしないだろうが、絶対にあり得ない、可能性ゼロとまでは言えないヤツだし。
つまり危険だから距離を取ったのだ。

もちろんそれだけが理由じゃない。
俺に対するものより、雪代に対しての態度の方が、ずっとシャクナゲは自然体であるように思えたから、止めようなんて気がサラサラ起きなかったのだろう。
少なくともこうやってじゃれあって……いるのかどうかは微妙だけど、動き回っていれば、昼間のバイトも相まって夜中に夢を見る可能性も少なくなる。
俺の渾身の力作である『抑制器』を持ってしても、一つっきりでは抑えきれない、あの暴れん坊な鎖達の無意識下での暴走も減る事だろう。
もし雪代が、そんな事まで考えた上で無茶苦茶を言っているのなら大したものなんだけど……多分そうじゃないんだろうな。
まぁ、意識せずに『有益な無茶苦茶』をやっているのなら、それはそれでスゴい事なんだとは思うけど。

「もうっ、当たんないし、疲れるしっ。でも、食後のいい運動にはなったにゃ～」

ノースリーブのタートルネックに、上からオレンジがベースのパーカーを引っ掛け、ハーフサイズのローライズジーンズと、鍔の広いキャップを斜めに被ったスタイルは、活動的過ぎる雪代にはよく似合っていた。メイド服なんかよりも、こっちの方が断然雪代らしい。

全体的に明るい色調の服は、そんな雪代の性格そのものを表しているかのようにも思える。
今は当たらなかった癇癪に少しだけ唇を尖らせてはいたけど、ポジティブな自己解釈をして再び上機嫌そうにケラケラと笑ってみせる。
彼女の癇癪をかわし続けて、肩で息を吐きながらぐったりしているシャクナゲとはどこまでも対照的だ。

「くそっ、一発も当たってないのになんでか負けた気がする」

拳を振るい続けるのと、体全身を使ってかわし続けるのとではやはり運動量が違うのだろう。しかし、その辺りを差し引いて考えても、元気さと前向きさで雪代にかなうヤツなんてそうはいない。
かくいう俺自身も、雪代雅には出会ってからこの方負けっぱなしだ。

「そうだよ、あんたじゃあたしに勝てないの」

一発も当たらなかったくせに勝ち誇る様が何故か様になって見える。それが別に可笑しかったワケじゃないけれど、俺の顔には自然と笑みが浮かんでいた。

――シャクナゲでは雪代には勝てない。
そう宣言してみせる事が、雪代なりの優しさなのか、はたまた天然ゆえなのかはわからない。
それでもシャクナゲが呆然としている様を見れば、今の言葉に受けた衝撃だけは分かった。
新皇であった自分。
新皇になってしまった自分。

少なくとも雪代はその事実を知っている。それをシャクナゲ自身も知っている。
それなのに今言った言葉からは、『あんたなんか別に大した事なんてないんだよ』と言っているように聞こえた。少なくともシャクナゲにはそう聞こえたのだろう。
気を使うどころか、むしろ気を使わせて、朝から振り回した末での言葉だ。さぞかしシャクナゲに大きな衝撃を与えた事だろう。

「ま、明日からも頑張んなさい。またご飯奢られに行ってあげるからさっ」
「いやいやいや、次はお前が奢ってやる番だろ」

だから俺も、今までのようにやたらとシャクナゲに気を使う態度を改めて、雪代が作り上げたノリに乗っかる事にする。
その方がこいつには効果的みたいであるし……何より荒療治も立派な手法だ。痛みを麻痺させるよりも乗り越えさせる為に動いてこそ、俺が俺らしい形で『相棒』と呼べる存在になれるだろう。

「明日も小料理屋の裏方頑張れな」
「……っ、分かったよっ」
「また昼過ぎにでも飯食いに行くからさ」

目を白黒させている表情が少しだけ笑える。吐き捨てるかのような調子ではあったけれど、素直に頷いてみせた辺りが滑稽だ。口元にはこらえきれない笑みが浮かんでしまう。

「まっ、昼定食ぐらいならあたしが奢ってあげてもいいよ」
「今日俺が奢らされた食い放題に比べたら、えらく安くついたな」
「このあたしが奢ってあげるって言うのに、文句を言うのはこの口かぁ！？」

「口って言いながら普通に目潰し狙いとか、女とか男とか以前に、人間としてアウトゾーンだろっ！？」

本当に仲良くなれたみたいで何よりだ。今朝までのどんよりした空気も、雪代にかかれば微塵と残らないらしい。

まぁ先ほどまでとは違って、今の目潰しとか普通に本気にしか見えないのだけれど、シャクナゲは見事なスウェーでかわしているのだから問題ないだろう。

問題ないと思い込む事にしよう。

なにせ、問題ありだったとしても俺には止められないんだからさ。

「ねぇ、アカツキ」

そう雪代が声をかけてきたのは、俺とシャクナゲがここ最近のねぐらとしている廃棄されたビルの一室での事だった。

シャクナゲはすでに寝床に付いているだろう。

散々引っ張り回されて疲れていたみたいだし、雪代のテンションに慣れていない事も負担になったはずだ。

俺は俺で、今日は雪代のせいでこなせなかった雑務があったから、暗い室内灯の中でマシンを起動させ、夜も更けた時間帯にも関わらず机に向かっていた。

「寝てなかったのか？」

「ん、まっ、疲れてはいるんだけどね」

仲間が持ってきてくれていた資材の一つである毛布をその細い肩にかけ、彼女は部屋の扉に背を預けていた。
そして両手に持っていた白いマグカップ二つの内、その片方を差し出してくれる。
それに小さく礼を言ってから手を伸ばし、最後にエンターキーを叩いて一段落を付けてから背後を振り返った。

「何か話でもあるのか？」
「話っていうか、確認……かにゃ～」
「確認、ね」

さて、何を確認したいのだろう。心当たりが多すぎる自分に苦笑してしまう。
まぁ、十中八九『シャクナゲ』に関する事なんだろうけれど。

「あいつってさ、本当に『敵』だったの？」

予想がどんぴしゃ過ぎて……というよりも、あいつを迎え入れた今更になってからの確認は、あまりにもど真ん中な発言過ぎて呆気に取られてしまう。
だって雪代は、今日一日一緒にいたのだ。特に警戒した様子もなかったから、雪代なりにシャクナゲに関しての考えにはケリを着けていると思っていた。
元からさっぱりし過ぎるほどの性格をしているし、噂や風聞だけで他人を評価する人間でもない。

「あいつは……敵なんかじゃないよ」

それでもなんとか返した言葉には、どこか弱さが滲んでいる事は

俺自身が自覚していた。
あいつは確かにこの国からしたら敵で。
変種ではない人々からしたら許されざる変革者で。
多くの人々にとっては、憎悪を抱くべき仇だろう。
でも、変種の立場からしたらどうだろう。特に関東という地方に生まれ、抑圧されてきた変種達からすれば？
そう考えた場合、あいつは変わるべき国の在り方と人の常識を揺るがした、最初の改革者の一人という事になる。
現に関東で起こった革命軍は、変種はおろか変化に柔軟で常識に捕らわれた部分が薄い若者達――そして力と時間が有り余った者達には、圧倒的な支持を得た勢力として、破竹の勢いで勢力を拡張していっている。

そう、単にあいつは、いまだ革命が起こっていないこの地方の人々と、身を置いていた位置やそこから派生した考え方が違うだけだ。
その力を持って起こした行動の先……圧倒的で反則的な力の先が、力に魅せられ、変化していく環境に惹かれた人々の暴走に繋がった。
それだけだ。

「本当はさ、敵なんて今のこの国にはいないんじゃないかって俺は思うんだ」

立場の違いが対立を生む。それは間違いない。
そういった意味では、確かに敵と呼べる存在はいるだろう。
でも、少し立ち位置を変え、見方を変えてみれば……あるいはほんの少しだけ出会い方さえ違っていれば、無二の親友になれた者達も『今の敵と呼べる存在』の中にはいるはずだ。
あいつがそうだ。新皇と呼ばれたあの少年は、単に立ち位置がマズかっただけで『暴悪なる変革者』、あるいは『最初の改革者』に

祭り上げられてしまっただけなのだ。

「あいつはさ、周りの人間みんなが先へ先へと走り続けていた中で、ただ一人後ろを振り返る勇気を持っていた人間……それだけだよ」

でも、あいつは――シャクナゲは、祭り上げられた立場を良しとはしなかった。一度後ろを振り返ってみる勇気があった。

行動が暴走し、思考が迷走し、欲望に壊走してしまった人々の中で、それを省みる事が出来た。一人だけ変わってしまったものを惜しむ事も出来た。たった一人で周りに間違いを正す為の行動が取れたのだ。

さらに、自分よりも強い相手――幼なじみという親しい相手と向き合う覚悟まで持てたというのなら、それは最早過去を懐かしむだけの甘さや郷愁なんかじゃない。

それは強さ、勇気なんだと思う。

弱さや臆病さだとは誰にも言わせない。あいつ自身にも言わせるつもりはない。

「多分、この国は近いうちに壊れるよ。もう長くは持たない」

コーヒーをことさらゆっくりと口に運んでから言った一言。

それは簡単な予測で、外れようのない未来。止める事の出来ない結末だ。

誰も過去を振り返る余裕などなく、先へと転がり続けた先にある道だ。

そんな未来で、進化を謳った変種達……中でも権力を握った者達の中には、ひょっとしたら『取り返しのつかない選択』をする者もいるかもしれない。最悪の『進化論』を進めていく者がいる可能性がある。

――旧種である既存の人類を淘汰する事で、種の強制進化を促す者。
つまり既存の人類を殺し尽くしていく事で……生まれたばかりの子供であれ、変種の兆候がなければ殺してしまう事で、種の進化を強制的に進めようとする者。
そんな存在がいないとは限らない。
いや、変種として虐げられた者達ならば……そして強大な力を持つが故に、孤独に溺れている者ならば、周りを『同族』ばかりの世界に変えようとする人間がいる可能性はかなり高い。
そんな強制進化が上手くいく可能性は高くない事は明らかなのに。
変種がいきなり生まれだした事を理由に……そして『短期間での進化は一度起こった』という事だけを支えに、そんな馬鹿げた事をしでかすヤツがいないとも限らない。

そんな存在こそが、雪代の言った敵――『俺の本当の敵』だ。終生交わる事のない天敵だ。

俺はその現れるかもしれない敵こそを恐れている。まだ見ぬ天敵に恐怖している。
その考えは誰にも語っていない。今は教えるつもりもない。
それが荒唐無稽な推論だと笑われる事が怖いからではなく、単にその推測を語るには相手を見極める必要があったからだ。

絶対的な力を持ちながら、そんな最悪の進化を否定する勇気を持つ者。
どんな事があっても、どれだけ傷つく事になっても、今までを……周りの人々を好きでいられる強さを持つ者。

そう。例えば皇と呼ばれ、周りに持ち上げられても、その立場に狂わなかったような人間――つまり彼のような人間にしか話せない。

「シャクナゲは敵なんかじゃないよ。絶対にあいつは敵なんかにはさせない。
――あいつは未来の為に……これからを生きる人達の為に俺が残せる希望になってもらうんだから」

そう言って笑みを浮かべてみせるも、雪代の表情はどこまでも冴えない。
俺の言葉の足りない部分を読むかのように目を細めて、小さな溜め息を漏らす。

「……あんたはさ、昔っからなんにも教えてくれないよね」
「そうかな。そうかもな」

俺が何を考えてシャクナゲを迎え入れたか、何故あそこまで彼にこだわるのかは誰にも語っていない。
雪代はもちろん、無銘の仲間達にも教えていない。
中には、示威武力として彼の力を求めただけだと考えている者も少なくはないだろう。

「……あんたが何を考えているのかなんてさっぱり分かんないんだけどさ」

そう言いながらも雪代は微かに笑みを――無理矢理浮かべたような笑みを刻みながら、そっと誓いを立てるように胸の前で腕を組んでみせた。
俺が何を考えているのか、何故何も語らないままで動いているのかには言及しないままで。

「気にしない事にする。あんたはどこまでも甘いヤツだからさ」

「悪いな。今はまだ推論の域を出ない、世迷い言にも似た事に備えているだけに過ぎないんだ」

本当に世迷い言だったら……そのままで終わってくれたら、どれほど気が楽だろう。

世迷い言に迷っているなんて、自分でも少しだけ可笑しいのだけれど。

「あいつがどうしようもないヤツだったら、無銘への本格所属後の初仕事は、危険極まりない大仕事で、とんだ汚れ役になるトコだったんだけどね」

「……物騒なヤツだな。お前はそんなつもりで今日いたのか？」

「まぁね。例え力を抑えていても、あたしぐらいしかその役割を果たせるヤツなんていないじゃない？」

今日、シャクナゲの面倒を頼んだ時。そしてそれを受けた時、雪代はかなりの覚悟を持っていたという事に今更ながら気付かされる。

そんな雪代の考えが今になって始めて分かり、自分のいたらなさが情けなくなる。

「良かったよ。これであたしは、あんたとあいつを支える土台になれる」

それでも……そんな自分の考えにいっぱいいっぱいの俺にも、彼女は笑いながらそう言ってくれた。

「あんたが未来とあいつを支える柱になるのなら、あたしがその柱ごと全部を支える土台になる。あたしの力が先へと続く道を切り開く為の剣になる」

「いいのか？　その……」

今までの生活を捨てる事になっても……という言葉は。
情けなく霞んでしまった俺の言葉は、雪代の笑みに掻き消されてしまった。
そしてその後に続く、前向き過ぎる発言に打ちのめされてしまう。

「捨てるんじゃないの。『大事に置いておく』の。またいつか戻ってきて、もう一度始められるようにね。捨てるなんてまっぴらゴメンよ。もったいない」

その言い様は格好よく。
どこまでも雪代雅らしく。
清々しいまでに生き汚い。
美しく見えるほどに迷いがない。

「だから今から……これからは、あたしも本当の意味での無銘の一員になるよ。
あたしがあいつと共に、あんたの世迷い言ってヤツを壊してあげる為に」

9・沙羅双樹の花の色一（前書き）

遅れました。今回から起承転結の『承』にあたる部分です。
いよいよアカツキが動き始めます。

マーク。あんまり進め過ぎるとノクターンのネタをバラしてしまうので、ちょっと更新に悩み気味。
マークの方が書いてて楽しい部分も多いんですけどね。

インフルエンザにはお気を付けて。
咳が止まらなくてヤバいです。
来週はノクターンの更新。
でも体調次第ではまた遅れるかも……
今回は最終見直しと編集、アップだけだったから楽にいけたけど、ノクターンはまだちょっと弄る部分がありますから。

では、『沙羅双樹の花の色』をどうぞ。

9・沙羅双樹の花の色一

『ちっ、もう来やがったっ！　アカツキ、ヤバいぞっ！　そろそろズラかる準備をしてくれ』

トランシーバー越しに年長の仲間のそんな声が聞こえ、辺りでブツを漁っていた仲間達はハッとしたように身をすくめた。

どことなく怯えたように見えるのは、やはり今している『行動』に罪悪感があるからだろう。もちろんその『行動』が『どういった相手』の怒りに触れるものかという事も関係しているに違いない。

「思ったよりも時間がなかったな。もうちっといけるかと思ったんだけど……仕方ないか。ミヤビの首尾は？」

『ミヤのヤツなら、今頃やっこさんらの親玉んチにテロった帰り道だろうさ』

「……ふん、田舎ヤクザの親玉にしちゃ度胸が座ってんな。ミヤビに遠距離から襲撃されたら、鉄砲玉を警戒して子分共を周りに張り付けるんじゃないかと思ってたのに。とりあえずアカツキ、了解。オーバー」

そう言って通信を切ると、周りにいた仲間達に撤収の合図を送る。

今俺達『無銘』は、聖祖とも繋がりがある地元の暴力団が管理する『倉庫』に襲撃をかけているのだ。

これは件の列車差し止め事件以来、鰻登りに過激化する連中の暴挙に対する抗議の意味と、ウチの蓄えを増やす一石二鳥の作戦なのだが、仲間達は気が進まないのか運び出し作業は難航していた。

聖祖の連中としても一応は宗教団体なのだから、ヤクザと繋がりがある事は広言出来ないし、あの連中は相手が変種だとみれば強盗じみた真似すらしてくるのだから、こちらが遠慮する事もないとは思うのだけど、やはり倫理観といったものが邪魔しているのかもしれない。

それだけじゃなく、相手が相手だという事で尻込みをしている部分もあるのだろう。

『剣匠』ことミヤビが連中の親玉の家に剣の爆撃をかけ（もちろんやり過ぎないように、と口を酸っぱくして言い含めてある）、相手の目を長の護衛に向けた間に作業をこなすという段取りは説明したのだけど、やはりそんな言葉だけでは完全にマイナス思考を払拭は出来なかったようだ。

「さって、んじゃお暇するかね」

――予定の半分ほどしかいってないのに。

そう愚痴りたくはなるがそれはなんとか抑え……一応大義名分を立てた以上、意地汚い事は言えない……浮き足立った仲間達に撤収命令を出す。

その仲間達の中には、いかにその筋の方々とは言え既存種の者よりも、身体能力だけならば上回っている者が何人かいる。

ただし、能力を持っている事と戦える事は全くの別物だ。

今のウチの仲間達の中で戦いに長けた者は決して多くない。最近加入したばかりのミヤビにも勝てる者はいないだろう。

あいつの場合、敵対者には容赦とか躊躇いといったものが少ない分、その能力を生かしきれているというのはあるだろうが。

今回の場合、相手は場慣れしたヤクザ者。しかも聖祖とのつながりからこちらを殺しても構わないつもりで来ている、と考えるだけで仲間達は震え上がって戦いにすらもならない。

もちろん、いざという時の備えはある。その辺りに抜かりがあるほど間抜けなつもりはない。

ウチで二番目に戦いに長けた雪代……ミヤビも、生まれ持った特殊能力だけなら彼女にも劣らない非常に高い攻撃力を持つクロネコもここにはいない。雪代は襲撃兼陽動班を率いているし、クロネコには色々と大事なデータが詰まったメインマシンを置いてある本部を防衛してもらっている。

他の数少ない戦闘班のメンバーも、裏で暗躍している聖祖の実働部隊との暗闘を日夜繰り広げており、他に回せる余裕などありはしない。

彼らには、不当に聖祖から迫害を受けている同朋や、その家族達の保護といった一番大事な役割がある。それをないがしろにするワケにはいかない。

「出番、か」

それでも今の俺には彼らに代わるだけの『備え』があるのだ。

ミヤビを始め、他の賑やかな仲間達との交流によって、ほんの少し——簡単な仕事ならこなせる程度には、精神的にも安定してきた俺達『無銘』の新たなる仲間。

俺の『アカツキ』という呼び名と同じように、本名に代わる『コードネーム』だけを持った徒花の銘を持つ鬼札。

無銘が誇る『剣匠』との二枚看板の壱。

空圧の弾丸を放つオートマチックを持った、黒衣の少年が。

「頼む。適当に足留めをしてくれるだけで構わない。むしろ足留めだけに専念してくれ」

倉庫の入り口で手持ち無沙汰な様子をみせながら壁に背を預けていた彼は、その言葉に返答もなく背を向けて歩き出す。

首肯も了解の言葉もなく、その薄手のオーバーを翻して。

そんな少年に小さな苦笑を漏らし

「さぁ、俺らは撤退だ。殿(しんがり)は俺と山川。あとのみんなは持てるだけ持っていってくれよ」

残る仲間達にそう指示を飛ばす。

今回の計画はアンダーグランドの連中を相手取ったものだけに、狙いのブツも相応にヤバいものが多い。

数はそう多くないが、銃器や銃刀法に引っかかる刃渡りの刃物、禁制の薬物などまである。

もちろん法に引っかかるブツに手を出す事が危険な事ぐらい百も承知だ。しかし、それに見合うだけのリターンも約束されているのだ。

今はこういった武器などが必要な時期にきているし、普通に手に入れるには大金が必要な上、金を払っても危険が全くないワケではない。法に引っかかるという時点で十分以上のリスクがかかっている。

特に変種に対する風当たりが強くなっている今現在では、法に引っかかるというリスクだけでもかなりデカい。

そういった事を考慮すれば、タダで手に入れられる分だけ、アンダーグランドの連中を相手取る方がまだマシだと考えた。

つまり、今の『彼』と『ミヤビ』が入った俺達ならばイケると判断したのである。
貴重な資金はもっと真っ当な物資をかき集める事に使った方がずっと有意義だ。それを買い集めるだけでも、計算上ではカツカツ……というより、予算のアウトラインを何歩か踏み越えている。
そういった事情からも、真っ当じゃない敵性組織から略奪する事が一石二鳥だったのである。

また、違法なものほど付加価値がつくのは人の世の常だ。それは禁止薬物然り、非合法な重火器然り。予算面がどうしようもなくなれば、そういったものも資金に変わってもらう事になる。
そういった伝手も『ＡＫＡＴＳＵＫＩ』にはある。
人道だの倫理だのといった事を言っている余裕はないのだから、俺が流した薬が原因で薬物に溺れる連中が生まれる事には目を瞑る。
……瞑ると決めた。
俺一人でそう決めた。
そういった人々の人生を切り捨てて、見知らぬ他人の今後を勝手に切り売りして、俺の中で優先順位の高い人達の為に動くと決めたのだ。

「さぁ、行こう。さっさと行かないと、足留めをしてくれているあいつが逃げられない」

俺と共に最後の荷物を抱え、止めておいた車両に向かう連中の最後尾についた仲間にそう呼びかけ、気持ち急ぎ足で歩を進めていく。

ぐちゃぐちゃに腐りきった、人の道から外れた外道へ至る道へと。
極少数以外を切り捨てて先を見据える非道の道を。
犯罪に手を染め、人から奪い、いざとなったら『誰か』の零れ落ちる命すらも、俺の勝手な考えで見捨てて進むとそう決めて。

――地獄に落ちる覚悟ならとっくに決まっている。
皇の供をすると決めたあの時から、俺が行きつく先はそこ以外には有り得ない。
深淵のさらに深くからまだ見ぬ未来を夢見ているだけでいい。
いつか今とは違う明日に笑う事が出来るのなら……その可能性を遺せたなら、俺はそれだけで構わないのだ。

「でね、でね、『にゃ～っ！』と行って、『しゃ～っ！』といったのよ。あの見るからに悪どく儲けてそうな豪邸がさ、それだけで大混乱さぁ」

にゃ～っ！の部分や、しゃ～っ！の部分がよく分からなかったけれど、ミヤビはかなり興奮していた。
まぁ、その気持ちは分からなくもない。
もともと感情の起伏が激しい……もっぱら上方面に……ヤツである事は差し引いても、今回彼女が大活躍だった事は間違いないからだ。
その報告は、ともに行った仲間達からも聞いている。『その筋の方』の本邸を襲撃する陽動の役割は、もっぱら彼女一人の活躍で成功したようなものらしい。
自らの能力で精製し支配する剣を、爆弾を投下する爆撃機のごとく降り注がせて屋敷を大混乱に陥れただけではなく、業界語で『長ドス』やら『チャカ』やらを持って警戒に出てきた相手を、その卓

越した身体能力と夜の闇を味方にして翻弄し、全員きっちりと伸して帰ってきたらしいから。
『そんな大人達は修正してやるぅ！』
とか
『汚物は消毒だぁ！』
とか、どっかで聞いたセリフを吐きながら意気揚々と出て行ったから、もっとメチャクチャをするかと内心憂慮していただけに、彼女の頑張りは嬉しい誤算だと言える。
「ちょっとっ！　アカツキってば聞いてる！？　このミヤビさんの武勇伝を聞けないってのっ！？」
「違うって。ただ――」
――まだ帰ってきていない『あいつ』がちょっと心配で。
そう返事を返そうとして、ちょうどその時に開かれた扉の先に、その『あいつ』が姿を現した事で俺は言葉を途切れさせた。
きっちりと足留めを果たして。
同行した俺達強奪班を、全員無傷で帰還させて。
彼に望まれた『役割』を完璧にこなしてみせて。
それでも何故かいつもより濃い諦めの色を見せる無表情で佇む年下の少年に、言葉を途切れさせざるを得なかった。
「お帰り。……で、なんかあったのか？」
「別に」
別に――で済むような表情では決してなかった。
ここ一ヶ月近く、彼がこんな何かを含んだ表情を見せた事はほとんどない。こんな表情を見せるのは、だいたいが『悪夢』にうなさ

れた朝ぐらいのものだ。
彼は……『シャクナゲ』となった彼にはこんな表情は似合わない。
「何かあったなら教えてくれ。俺には今回の作戦を立案した責任があるんだ。報告はしっかりして欲しい」
だから少し無理矢理でも、作戦立案者という立場を利用してでも話を聞き出そうとして。
「別に今回の作戦で言うべき事は何もない」
拒絶される。
少なくとも俺には拒絶されたように感じられた。冷たくそう言い放った彼に『お前には関係ない』と言われた気がしたのだ。
それに少し呆然として。
そんな俺をそっちのけで、隣にいた少女が暴発する。
俺よりもあらゆる感情の沸点やら臨界点やらが遥かに低い、『剣匠』と呼ばれる少女が食ってかかる。
「ちょっと、あんた！　なんか嫌な事があったんだとしてもさっ、もう少し言い方ってものを考えられないワケっ？」
「おい、雪代――」
「おシャラップっ！」
食ってかかるミヤビに、ついうっかり今までの呼び方で呼びかけるも、ペシンっとおでこを叩かれて黙らさせられる。
単に軽く叩かれただけでも、彼女の腕力でやられては洒落にならない。『ペシン』ではなく『ベシッ』と聞こえ、視界が一瞬ブラックアウトして星が散る。
――『おシャラップっ！』というのはひょっとして『お黙りっ！』

という意味だろうか？
そんな取り留めのない事を考え……目の前で鼻息荒く身を乗り出しているミヤビと冷たく見つめ返すシャクナゲを見やる。
彼の事情を知る仲間達のほとんどが彼を避ける中で、ミヤビだけがその過去に憚る事なく接している。
彼もまたミヤビにだけは話し掛けられた時には、面倒くさそうな色を見せながらも返答をしていた。
まぁ、話し掛けているのに返事をしなければ、ミヤビの場合容赦なくグーが飛んでくるから……という理由もあるだろうが。
しかし今の彼には、ミヤビと接していた時だけはほんの僅かに解放していた『他者を拒絶する壁』が、高く堅固に築かれたままだった。
それは断じて勘違いなんかじゃない。何故なら、俺に対してはいまだ開かれていないその壁を、今までずっと焦燥感に苛まれながら見上げてきたのだから。
それを僅かに開いてみせたミヤビを、羨ましく思ってきたのだから。

「ほら、なんかあったならキリキリ言うっ！　何人かで何か行動する時には、ちょっとした事でも『ホウレンソウ』ってのは常識でしょうが！？」
「……ホウレンソウ？」
ほうれん草ってあれだろうか？
血の流れをサラサラにするという、おひたしにしたら美味い緑黄色野菜……だとしたら、今の状況になんの関係が――。
そう思ったのは俺だけではないらしい。

シャクナゲもミヤビの言葉に小さく首を傾げながら、その外套の襟首をガシッと掴まれていた。

「『報告』！　『連絡』！　そう……そう、なんだっけ？」

「繋がりからすれば相談とかじゃないか？」

「『相談』！　で『ホウレンソウ』よっ！　常識でしょっ！？」

常識とか言う割に忘れてたっていうのはどうなんだろうな。やっぱりその辺りはつっこんだらマズいんだろうか。

……マズいんだろうな。

「別に報告も連絡も相談する事もない」

「嘘つけっ！　このミヤビさんの目は騙せないかんねっ！」

あぁ、取りあえず吐いた方が身の為だと思うな。俺も気にはなるけど、それは差し引いて考えても素直に話した方がいい。

……そう、出来ればミヤビがこれ以上熱くなる前に。

しかし、そんなてんやわんやの騒ぎの中でも――ミヤビにその襟首を掴まれてガンガン前後に振られながらも、シャクナゲは面倒くさそうに、でもどこか虚しさを感じさせる表情で彼女を見返していた。

それはミヤビが持つ天性の明るさでも照らせない、深い深い場所から見上げてくるような表情で。

宵闇よりも真っ暗な場所から見据えてくるような瞳で。

関西（こっち）に来てからもよく見せていた暗い表情だ。

「報告も連絡もないよ。嘘じゃない。相談するまでもなくあらかじめ分かっていた事を再確認して……勝手に再確認させられて、改めて虚しくなっただけなんだから」

「何が言いたいのよ？　いい加減はっきりしないと――」

脇に置かれたままだったスチール製の椅子がパキパキと乾いた音を立て、『錬成』されていく音が響く。

それははっきりしないシャクナゲの言葉に……どこか暗い表情で自分を見据えてくるだけの少年に、苛立ったミヤビがその能力を解放していく音だ。

それを『マズい』とは不思議と思わなかった。

『彼』ならなんとかするだろうとたかを括っていた。こんな場でも平静なままでいられてしまった。

それが今までの『俺らしくない』考えだとは――他人を傷つける為の力を、安易に用いる事を嫌うはずの俺らしくない考えだとは不思議と思わなかったのだ。

後になって考えてみれば……その時平静でいられた俺自身にゾッとする。

ミヤビのいつもの癇癪だろう。

彼だから大丈夫だろう。

『思わせぶりな態度を取っておいて、はっきりしない少年が悪い』んだから、彼女が少しばかり力を使ってみせて口を開かせても問題なんてない。

そこまで考えていたつもりはなかったけれど……そんなつもりはなかったはずだと思いたいけれど、俺らしくない態度だった事は間違いない。

「言うべき事なんて何もない。何もないんだ。だって、当たり前の事なんだから。知っていた事で……今まで何度も見てきた事なんだから」

そして彼の言葉に。
俺達が想像も出来ない『地獄』を見てきた男の言葉に、背筋を冷たい汗が流れ落ちた。

「人は簡単に慣れる。能力を使って誰かを傷つける事にも、他人を力でもって抑えつける事にも……びっくりするぐらい簡単に慣れてしまうんだ。そんな事を今更改めて確認した、なんて言う必要ないだろ？」
「……あっ、いや、これは今までもあたしってこうだったし」

部屋の隅に突き立った、椅子に施された塗装の黒とスチールの銀でまだらになった剣を彼は見ていた。
諦めてしまったような表情で。
でも悲しみも秘めた表情で。

「少なくとも俺はあんたに『能力』を向けられた事なんてないよ。ぶん殴られそうには何度もなったけれどな。
少なくとも、今まではこの程度の事で能力を使って脅しに走るような人だとは思ってなかった」
「……」
「初めての強攻策が上手くいって、このまま上手くいき続けて。
いつかあんたも――『あんた達も』人を傷つける事に慣れてしまったら、なんて甘い事を考えてしまっただけさ。
人は簡単に慣れる。他人を殺す事にも慣れてしまう。そんな事は今までずっと見てきたんだから……そんな事は知っていたはずなんだけどな」

そう言って、彼は虚空から現れた鎖であっさりミヤビの剣を打ち砕いた。

なんの所作も見せていない。その視線を僅かに細めてみせただけで、『彼が支配する世界』の端末が支配者の意思を汲んだ……それだけに過ぎないのだろう。
いとも簡単に剣匠の連結した剣を微塵に砕いてみせて、少年はジッと少女を見据える。
襟首を掴んでいた手を払い、呆然とするミヤビをその深い闇色の瞳で真っ直ぐに見つめる。

「あんたは人を傷つけた。死者出ていなくても、あんたの『力』をまともにぶつけられたなら、後遺症ぐらいは残ったヤツもいるだろう」
「……っ」
「それに気付いていないなら――あんたはもう戦わない方がいい。その力はいつか仲間を傷つけるだろうから。
気付いていてそれでも笑えるなら――」

――バンっ！
左手の人差し指を立てて拳銃に見立てると、ミヤビの額に向けて引き金を引いてみせる。
無表情で。
あくまでも無表情のままで。
でも何故か泣きそうにも見える表情で。

「いつか俺達は袂を分かつだろう。
忘れるなよ、あんた達は人を傷つけた。傷つけたんだ。『殺してはいない』『これなら少ない犠牲だ』なんて言い訳を自分に許すな。全部忘れずに抱えていけ。
あんたは――」

――あんた達は、俺や『彼女』みたいにはなるな。

そう呟いて。
そのまま踵を返し、彼は部屋を出て行った。
呆然しているミヤビと唖然としている俺もその場に残して。
その言葉に込めた、深い想いと一瞬放たれた鋭い殺気じみたものだけを部屋に残して。

１０・沙羅双樹の花の色二

災難はたたみかけるかのように訪れる。そう言ったのは果たして誰だっただろうか。

そんな事を考えながら、今日一日で起こった数々の問題に俺は顔をしかめていた。

余りにもたたみかけ過ぎなほどにやってきた厄介事に、内心で精一杯の悪態と呪詛を吐き、ほんの僅かな諦観に肩を落としながら。

あの日――

シャクナゲに『自分達みたいにはなるな』と諭されたあの時から、俺とミヤビ、シャクナゲの間にはちょっとした軋轢みたいなものがあった。

それ故に問題が起こるだろう……俺やシャクナゲはまだしも、ミヤビのヤツが絶対に問題を起こすだろう、それぐらいの事は考えていた。

ただ『運命論否定者』たる俺には、災難というヤツも遠慮をしてはくれないらしい。

ミヤビが問題を起こすのとほぼ同時に三つも問題が起きては、さすがの俺も硬直する他ない。

「決闘状、ねぇ……」

なんだ、これは。
あほか、やっぱりあほなのかお前は。
目の前のテーブルに叩きつけられた封書の上の文字をそのまま読み上げながら、隠す事もそのつもりもない胡乱げな表情を目の前の少女に向けた。

「そうよっ！　このミヤビさんがあそこまでスカされて、相手にされていない見下された視線を向けられて黙ってなんていられないわっ！」

……そうか？　『スカされた』かどうかは分からないけれど、相手にされていないという事はなかったように思うし、間違っても見下されてなどはいなかったと思う。
どちらかと言えば、『俺達を見上げていた』んじゃないか――と言えば穿ち過ぎかもしれないけれど。
まぁ結果だけを見れば、相手になっていなかったのは間違いない。

「剣をあっさり砕かれて、いとも簡単に間合いも詰められて……。あの日、あたしがどれだけ悔しかったか、あんたに分かるっ！？」

まぁ、俺もあの時の事は悔しかったけれど、それはどちらかと言えば自分に対する悔しさだ。
作戦が上手くいって、犠牲も出なくて、その上予想よりは少なかったけれど、ちゃんと結果も出た。
でもそれで『安易に喜んでしまった』。
認めたくはないけれど、自分の行動が正当なものだと心の中で思っていたのだろう。
自分の考えが、そして末の行動が、『単なる自己満足』で終わる覚悟は持っていたのに……自己中な最低野郎で生きていくつもりは

あったのに、だ。

そしてもう一つ。

ミヤビならば、シャクナゲに対する抑止力になると思っていたのだけれど、それも甘い見積もりだったと言わざるを得ない。

あそこまであっさりと『剣』を砕かれ、間合いを詰められてしまうなどとは思ってもいなかったのだ。

能力を半分以上抑えたから……抑えたはずだからと、自分の考えが及ぶ範囲で見積もっていた。

――そう、俺は全てに置いて甘かったのだ。

それでも彼女を前にした今は、改めて自分の甘さについて考えを巡らせる余裕はなかった。

「今から一週間後っ！　あの時の借りはきっちりすっきり返すっ！
これはきっかり一週間後、あいつに渡してねっ！
さぁて、修行だ、修行だぁ！」

そう言って、俺の言い分も効かずにミヤビは部屋をあとにした。

『シャクナゲに渡すように！』

と言って、達筆で『決闘状』と書かれた左前に封をされた封書を残して。

一応俺を頭にした集団に所属しているはずなのに、便利な小間使いのごとく俺にご用を言いつけて。

指揮系統に乱れどころか、一本筋の通ったところすら見受けられない『剣匠』の様子にこそ、俺は頭を抱えさせられていた。

「比芙美がやられた！？　誰にだよっ！」
『分かりませんっ！　連絡を受けて何人かで連れ立って行ったら、焦げた地面に遠藤さんが倒れてて……』

そんなミヤビの様子に唖然としたその日の夜の事だ。
渡された封書をどうすべきか一通り悩み、とりあえず保留した後の事である。
俺に――『無銘のアカツキ』に緊急の連絡が入ったのは。
その連絡は内容からすればさして珍しくもない……こんな風に言いたくはないが、よくある『仲間が誰かに攻撃された』という報せだった。

「で、無事なのか！？」
『えぇ、綺麗に気絶だけさせられたみたいで、大きな怪我はありません。ただ――』
「ただ……なんだよ？」
『……少し錯乱しています。いえ、心が折れてる、と言った方がいいかもしれません』
「心が折れてる？」
『はい。気がついた時からずっと震えているんです。暴れる様子はないんですが、完全に怯えてしまって』

ファイヤースターター（発火能力者）遠藤比芙美。
我が無銘に所属する発火能力者達の中では、『飛炎』こと飛坂緋室（とびさか・ひむろ）に次ぐ力を持つ変種である彼女がオフの最中に襲撃を受けたとの連絡に、さしもの俺も相当慌てさせられた。
今までそういった『襲撃』をメンバーが受けた事はあった。それこそ日常茶飯事に近い範囲で。

しかし今回の襲撃事件にはおかしな点がいくつもある。不可解な点がありすぎて、俺の理解が及ばないのだ。

まず『比芙美』は、戦闘能力といった面だけでみれば、我が無銘でも十指に入る能力者だという事だ。そしてその性格も、襲撃されて熱くなり下手を打つようなタイプではない。

ウチのメンバーを襲撃する輩といえば、まず間違いなく『聖祖』の連中なのであろうが、よっぽど不意を打たれたか遠距離からの狙撃でもされたかしない限り、比芙美が聖祖に所属する既存種に1対1で遅れを取る事はないはずだ。

もし襲撃してきた者が大人数であれば、比芙美はあっさりと背を向けて逃げられる性格なのだから、よくある聖祖の襲撃であれば『戦いになる事すら稀』であると思えたのである。

「とりあえず無事は無事なんだな?」

『はい。怪我は背中に擦り傷がある程度で、大事には至らないかと思われます』

「そうか……」

何より念を入れて改めて聞いた言葉。これこそが一番の不可解の元であり、今回の襲撃が普通ではない点だろう。

ウチのメンバーが敵対組織に襲撃されたのに『五体満足で発見される』。

今まであった『襲撃』からみれば、この点だけ見てもかなり異常な事態だと言える。

聖祖の連中に攻撃を受けたなら、まず間違いなく『殺される』。ただ変種だと、変種の仲間だというだけで、聖罰という唾棄すべき名前の私刑でもって殺されるのだ。

ウチの仲間達の何人が、自己中なファッキン野郎共のクソッタレな理屈でもって殺されたか、仲間以外でも何人が『無銘と間違われ

て殺されたか』。
数えるだけでも憂鬱になる。
犠牲者の名前を記憶に刻む作業は、いつも吐きそうになる。
それらを考えると、今回の襲撃は『まだ全然笑える』範疇なのであろうが、それだけに余りにも不可解なのである。
その不可解さは不気味さと同義なのだ。
間違いないのは、ミヤビの事で悩まされているというのに、もう一つ悩みの種が上乗せされたという事だけだった。

とりあえず比芙美には明日会いに行くと連絡をして、今休んでいる本部の中にある休憩所に足を運んだ。
もう夜も更け、丑三つ時を回っている。本当ならば明日に備えて眠っておくべきだろう。
それは分かっていても、いろいろと考える事が多すぎて眠気がやってきてくれないのだから仕方がない。寝よう寝ようと、いつやってくるか分からない眠気を待つのは性に合わないし、そんな無駄な時間を過ごすぐらいなら眠る前に一仕事片付けておいて、眠気がやってきたらゆっくりと眠る方がずっと効率的だ。
少なくとも俺はそう考えて夜更けにこの休憩所を訪れる事がたびたびあった。
そこに今夜は先客がいた。
「あれ、アカツキじゃん」
「あぁ、クロか。お疲れさん」

「ま、警備主任としちゃ夜は気が抜けないけどねぇ。そこまでお疲れでもないよ」

――少なくとも、あんたよりは疲れてないと思うよ。

そう言って、先客たる男は茶目っ気溢れる視線を向けてきた。

音使いの通称『黒猫』と呼ばれる仲間である。

鴉の濡れ羽のような黒髪に、線のように細めた目蓋の奥には深い緑の瞳を持った『無銘』の古株だ。

ミヤビやシャクナゲよりも仲間になったのは早く、シャクナゲが聖祖の囲みを突破した時に俺に連絡をくれたのは彼だった。

「あぁ、確かに今はお疲れだよ。新入り達――特に『剣使い』の方は好き勝手やってるし、東から来た方は気難しいしでさ」

「あはー、俺はそういう神経使うのは苦手だかんねぇ。助けらんないや」

そう言ってひょいと立ち上がると、クロは保温用のポットから温めのお湯を淹れ持ってきてくれる。

そのポットは俺が――『体に気遣っている俺』が、夜中にはお茶もコーヒーも飲まない為に置かれているもので、他の仲間達が使っているところは見た事がない。

「んっ」

「ありがと」

湯のみを受け取り、軽く礼を言うと嬉しそうに目を細める辺り、本当に猫じみた表情をしていると思う。その猫のような身の軽さは、変種の中でも高い身体能力によるものであるけど、彼の神懸かり的な直感は果たして人間が本来持っていた野生のものなのかどうか。

特に相対した相手の力量を読む事や、罠や待ち伏せに対するものはもはや予知じみたものにすら感じる。
それは一時期、俺の興味の対象になっていたほどで、ひょっとしたら今後の出来事な中で彼が持つ音の力より『直感』の方が、俺達を救ってくれる事が多いんじゃないだろうかと思っていたりするほどだ。

「あぁ、東の方から来た新入りで思い出した」
「あいつがまたなんかやらかしたか？」

そんな風に『黒猫の直感』に対して思考を巡らせていると、彼はふと思い出したかのような様子で口を開いた。

東から来た新入り――シャクナゲの場合、置いてきた環境に違いがあるから……余りにも違い過ぎるから、それが原因で問題が発生する事が多々ある。
身に纏う空気も独特で、人の目を惹きやすいタイプである事も否定出来ない。
つまりそれが原因で問題が起こる事は多々あり、あいつに原因がなくとも俺の溜め息の原因になるには事欠かない存在だと言えるだろう。
それを心配しての言葉だったが、クロは軽く首を振って否定してみせると、細めた視線を笑みの形に変えてみせた。
まぁそれは、微笑ましいものを見るような笑みではなく、イタズラを思い付いた黒猫のような表情だったけど。

「ちゃうちゃう、あいつさ、一回俺に見極めさせてくんないかなぁ？
ん？　見極めるって言い方は違うかな、なんか今まで会った事のないタイプだからさぁ、ちょっとねぇ」
「……こうやって確認するって事は、いまさらダメと言っても聞い

てくれないって事だよな」

この黒猫、作戦を無視したり、俺の意思に反した行動を勝手に取ったりはしない男だ。

その性格は強い力を持つ変種としては異様と言ってもいいほどである。強い能力を持つ変種は、そのほとんどが今までの生活環境……既存種の嫌悪に晒されて歪んだところがあるものだけど、クロにはそう言ったところが見受けられないのだ。

それは『黒猫』になる前の彼、身を置いていた環境に関係あるのだろうが……俺には分からない。

クロの過去が分からないのではなく、その『過去を聞いているからこそ』分からない。

――クロは無銘に来るまで、台湾系マフィアに属する凶手をしていた。

凶手とはジョブキラー、つまりは『殺し屋』の事である。

『シャンロン』小龍と呼ばれる、狙われたら最期とまで言われたほどの殺し屋だったのだ。

「聞くよ、アカツキの言う事なら聞くだけ聞く！」

「聞くだけ聞いて聞き流すだけだろ」

それなのにこの明るさが分からない。

この他人の言葉を真っ直ぐに聞ける性格が分からない。

そして素直に『今からシャクナゲにちょっかいを出すよ』と宣言し、なおかつ聞く耳持たないと暗に言ってのけるところが頭が痛い。

「アカツキは分かってるだろうけどさ……あいつは危ういよ」

さらにクロが――絶大な信頼を置ける直感を持つ黒猫が、俺と同

じようにシャクナゲの『危うさ』に気付いている辺りが怖い。

時折覗く深い闇。

底知れぬ奥深くから見上げてくるような瞳。

一筋の光すら射さない深淵を、たかだか十数年しか生きていない人間の表情から見る事が出来るなんて、それは一体どれほど『怖い』事だろうか。

その怖さが、闇が、深淵が、俺には見慣れていなくて、だからこそシャクナゲに対して危うさを感じてしまう――そう思っていたのに。

……そう思いたかったのに、クロが同じように『危うさ』を感じているとなれば、話は一気に現実味を帯びて感じられてしまう。

「俺はさ、何人も殺したよ。アカツキに拾われるまでは何人でも殺した。そうしなきゃ生きていられなかったから。生きる事を許されなかったんだからさ」

黒猫は元殺し屋だ。

凶手と呼ばれるジョブキラーで、殺しを生きる糧にしてきた男で。

だからこそ、俺なんかよりずっと近い位置からシャクナゲを見る事が出来るのだろう。

その音の能力は無銘に来てからほとんど見せた事がないけれど、殺しの為に力を使った過去が二人に共通してある事は間違いないのだから。

「でもね、あいつはきっと俺なんかよりもずっと多くを殺してる。自分が生きる為なんかじゃなく、もっと違う理由でね。

それは危ういよ。本当に怖い事だと俺は思うんだ。『自分が生きる為だった』って、『仕方がなかったんだ』って自分にも殺した相手にも言い訳出来ないんだから」

黒猫は過去を背負ってる。
今の言い分だと自分は言い訳をして生きていると聞こえなくもないけど、それでも後ろ向きな姿勢で言い訳をしているワケじゃないと思う。
自分が生きる為に殺してきたんだから、自分はまだ生きるべきなんだと言っているように聞こえたのだ。

でも、その言い訳がなければどうだろう。
殺した人々が夢に出て、口々に責められたのなら、果たしてその人々になんと返せばいいのだろう。
それはクロが言うように、とても怖い事なんだと思う。
殺した理由を言えず、ただ黙って責められて、ひたすらに罵られて。返す言葉もなく、納得させられる理由もなく、ただ責められ続ける悪夢。
殺した過去を見続けるだけの夢。
それがシャクナゲの夜中に起こす『発作』に直結している事は間違いない。
そしてクロの言う通り、確かにシャクナゲの精神は非常に危ういところにあるのだろう。

「あいつはさ、俺がちょっと確かめてあげるよ」
「……」
「これは多分、人を殺した事のある俺にしか出来ない事だと思うからね」

そう最後に確認の言葉だけを残して――返事も聞かないまま、クロはその場を立ち去っていった。
きっと止めても聞いてはくれないだろうな、そう思わせるだけの言葉の強さが俺に引き止める事を躊躇わせた。

黒猫はとても素直で。
どこまでも真っ直ぐで。
でも自分の考えを曲げる事はしないヤツで。
人を殺した事のある唯一の仲間。
今はまだ、本当の『汚れ』を知らない無銘にあって、シャクナゲと本当の意味で過去を共有出来るヤツがいるとすれば、それはあいつを置いて他にはいないのかもしれない。
俺はまだ、人の命を背負ったつもりになっているだけの若造に過ぎないのだから。

１０・沙羅双樹の花の色二（後書き）

マークは一人称のままアカツキ視点ばかりで本編はいく予定でしたが、今回からはそれ以外の視点の話も番外編のように入れていこうかとも思っています。
例えば今回登場したクロ。
彼とシャクナゲには因縁じみた設定があるのですけど、それはアカツキ視点からでは見えてこないものです。
見せ方次第ではいけそうな気もしますけどね。隠し設定として因縁を匂わすだけとか……う～ん。
隠し設定のまま行こうかな、やっぱり。
完璧に一人称でいく事にも未練ありますね。
次回アップまでに考えをまとめておきます。

11・沙羅双樹の花の色～殺人者、二人～

「こりゃまた……」

黒髪の少年は廃墟と化したビルを前に思わず立ちすくんだ。

少年ほどの力を持った変種であっても立ち竦まざるを得なかった、と言うべきか。

神杜市の港湾区、その中でも最も荒れている地域、通称『第三区』。

そこに今は一人、仮住まいをしている男に会いにやってきただけなのに、対面前に度肝を抜かれ唖然としてしまったのだ。

「たしかに第三は、治安のいい神杜の中で爪弾きにされたバカがはしゃいじゃってるトコだけどさ、ここまでボロボロなビルとか見た事ないよ」

神杜で爪弾きにされている者達の中に、自分が入っている事を彼は自覚している。

爪弾きにされるだけの理由……鮮やかな緑の瞳を見る度に、自分が変種なんだと少年は思い知らされてきたのだから。

もちろん『混迷にはしゃいじゃっているバカ達』の中には入っていないつもりだ。

それでもこの第三区という場所にはそれなりに馴染みがあり、普

通の人々ならば近寄りもしない場所でありながらも、彼にとっては特に恐れる場所でもない。今いる通りも何度となく通った事のある道だ。

だからこそ知っている。

この第三区と呼ばれる場所であれ――可愛いものであれば恐喝やひったくり、可愛げのないものであれば強盗や殺人といった事が日常茶飯事で起こり得る場所であれ、ここまでボロボロになったビルなどなかった事を。

「これがアカツキの言ってた『癇癪』、かな。最近はよっぽど『夢見』が悪いらしいね」

鉄筋コンクリートのビルの中には、無惨な落書きだらけになっているものがいくつもある。

全てのガラスが破られたものや、乾いた血がこびりついたもの、なんの匂いかは分からないが、ひどい悪臭が立ち込めるビルもこの区域にはいくつもある。

それでも、穴あきだらけになっている鉄筋コンクリートのビルは他にはないだろう。

ひび割れはあれど、綺麗にいくつもの穴が開けられたビルは、いっそ建てられた頃からそのデザインだったのではないか、そう思いたくなるほどに異常だった。

「……これだけの力を持っている変種、かぁ。皇と呼びたくなる気持ちも分からないではないかな」

それを個人で――しかも産まれもった能力だけでやってのけた存在がいる。

しかもやった本人は無意識で、『夢見が悪かった事に対する逃避

じみたもの』として、結果的に穴あきビルが出来ただけだというのだから笑えない。
少年の仲間である『剣匠』と呼ばれる少女ならばやってやれない事はないだろう。彼にもビルを壊すだけならば出来なくはない。
しかし、それは本気でビルを壊す為だけに能力を使った場合だ。
これをやった人間にそんなつもりなどさらさらなかったという点こそが、このビルを異質に見せているのだ。

「昔の同僚が何人も暗殺に向かって、その全てが返り討ちにあった『新皇』。
やっぱ大袈裟な話じゃなかったんだなぁ」

彼は昔、『黒虎（ヘイフー）』という台湾系のマフィアに暗殺者として所属していた。いや、物心つく前に彼の意志とは無関係で『所属させられていた』というべきか。
組織に拾われたのか、浚われてきたのか、はたまた親に売られてきたのかは分からない。
売られてきたのではないかと思っているが、それは少年の瞳が深緑色で物珍しい色をしていたからだ。変種についてよく知られていなかった時代に、この瞳の色は不気味なものに思えたであろうし、高く売れるセールスポイントにもなっただろう。
組織で変種特有の能力を見いだされ、変態や見せ物小屋に売られる事はなかったが、代わりに暗殺者としての道を選択せざるを得なかった。選択肢が一つしかなかったのだから、『選択した』とは言い難いがそれしか道はなかったのだ。
その黒虎という組織は、関東の横浜に拠点を置いていたのだが、そこが新皇が起こした革命によってモロに影響を受けた。彼等の縄

張りは縄張りと見なされず、アンダーグラウンドな組織である黒虎は利益を上げるすべを奪われた。
そこでまだ首都圏で国軍と争っている最中だった新皇を暗殺すべく、所属する凶手達に指令が下った事があったのだ。

結果だけを言えば失敗した。
真っ向からやり合う能力は持っていても、暗殺という不正規戦には慣れていないだろう……そう組織の上層部は判断し、なおかつ国軍と争っている最中である事から、国軍の動きを利用して接近出来ると踏んで行動を起こしたのに、作戦に加わった凶手達は誰一人として帰ってこなかったのだ。

若手ながら最高の使い手と呼ばれた少年は、その作戦に加わらなかった。
加わるはずだったのだが、関西で入ったビジネスを優先させるように通達され、難を逃れたのだ。
その依頼とは、とある新興宗教組織に敵対するまだ若い少年少女からなるグループのリーダーの暗殺。
本来ならばその程度の仕事など彼に回ってくるはずがなかった。しかし、関東の情勢が危うい中で、関西での後ろ盾となりうる依頼主とのパイプは、組織からすれば大層魅力的だったのだろう。
新興宗教団体から大枚を得た黒虎は、万全を期して組織最高の暗殺者を派遣する事にしたのである。

それが少年が、『アカツキ』と呼ばれる男と出会う事になった出来事。

依頼主は新興宗教だった『聖祖新教』。
ターゲットは変種、既存種の垣根を越えて人々をまとめ始めていた『アカツキ』。

かつては最高の暗殺者だった、今では『クロネコ』と呼ばれる男は、最初で最後の暗殺失敗によりクロネコとなり、アカツキという初めての友を得た。
その友の為に彼はこの異様なビルへとやってきたのである。
かつて『アカツキ』の代わりに暗殺へと向かっていたかもしれない相手。
この国で最初と最強を共に冠し、最高たりえる変種。
新皇の一角だった少年に会う為に。

「出ていけ」

部屋に入ったクロネコを迎えたのは、簡潔過ぎるその一言のみだった。
汗が蒸れた匂いと、乱れに乱れた寝具。グチャグチャに荒らされた部屋。
その中で部屋の隅に座り込んでいた少年は、顔を上げる事なくそれだけを告げたのだ。
荒い息はどこか悲鳴じみた掠れた響きで部屋に木霊して、頭を抱えこんでいる手は指先が真っ白になるほどに血の気がない。
それでもその一言は、抗い難い圧迫感を持ってクロネコにのしかかる。

「出ていけ、と言われてもねぇ。ここはあんたの所有地かい？」

そんな軽口が出ただけで、クロネコは自分を自賛したくなる。
目の前の少年の機嫌は、どう見てもいいようには見えない。それ

どころかいっそ『最悪』と言った方がいいだろう。
ただの少年ならば問題ないが、目の前の少年の力を思えば、その最悪の機嫌は容易に死因へと化けかねない。
彼はそれだけの力を持っているし、その力を完全に制御しきれていない事も聞いている。

「俺はアカツキの友達のクロネコって言うんだけどさ、ちょっと話をさせてもらってもいいかな？」

――『友達』。
アカツキの友達だと口にするだけで、クロネコは僅かな高揚感を覚えた。
友人など持つべくもなかった自分。
友人など持てる環境になかった自分が、初めて得た対等な人間。
その存在が彼にとってどれほど大きなものか。
きっと真っ当に生きてきた人間には到底理解出来ないだろう。出来るはずがないとすら思える。
その高揚感が竦みそうになる気持ちを強くしてくれた。僅かに怯んでいた心を平常なものへと導いてくれたのだ。

「……お前、ジョブ・キラーか」

その言葉による冷水を投げかけられるまでは。
僅か上げた少年の顔に、相反する感情を見るまでは。

「……隠していても分かる。お前みたいな気配を持つヤツは何人も知っているんだ。向こうでは毎日のように俺達の命を狙ってきていた連中だ。忘れるわけもない」

気配だけで『ジョブ・キラー』、『凶手』を見破れる者などまず

いない。
彼らも普通の人間であり、気配とてそれに準じたものを持っている。何より、気配なんてあやふやなもので職業を見破られていては仕事にならない。
もしそんな真似が出来る人間がいるとすれば、よほどその類の人間に縁があるか、あるいは自身も同じ立場であるかだ。
もしくは『殺し屋』と呼ばれる人間以上に、不当な人間の死を見てきたならばあるいは分かるかもしれない。

「その年で俺みたいなのに狙われるなんて、よっぽど日頃の行いが悪かったのかい？」
「日頃の行いは悪かったな。地獄でも受け入れ拒否されそうな程度には、な」

動揺を隠しながらのクロネコの言葉に、軽口を返しながら少年はジッと彼を見やる。
最初に感じた『絶望』と『歓喜』という、相反する二つの感情を宿した瞳で。

絶望はわかる。
アカツキの知り合いの殺し屋が来たならば、自分を危険視したアカツキに裏切られたと思うのが当たり前だ。
だが歓喜は？
狂喜と言ってもいい、渇望するかのようなその瞳が何故なのか、それがクロネコには分からない。

「お前が何をしにきたのかは分からない。でも、もし俺を殺しに来たのなら……それは諦めた方がいい」
「大した自信だね」
「これは自信なんかじゃない。経験による確信だよ。今の俺でも『

お前じゃ勝てない』」

それでもその瞳に映る感情は、絶望の方が大き過ぎて。

僅かな歓喜はあっさりと諦観に塗り潰され、絶望へと染められていって。

「アカツキがよこした相手だ。ひょっとしたら……って期待したけど、どうやらお前も違うみたいだ。

だって俺の世界は、『お前に脅威を感じていない』んだから」

そう言って、彼は再度『出ていけ』と通告を繰り返す。

上げていた顔を俯け、頭を両手で抱えるようにして、もはやクロネコにはなんの興味もなくなったかのように、視線を向ける事すらしない。

世界という言葉にクロネコは聞き覚えがあった。

それが純正種と呼ばれる変種が持つ、異能の源である事は知っていた。

そして純正種と呼ばれる人種が、産まれ付き持っている力がどれほどのものなのかも理解していた。

それは昔、彼が何度か純正種をターゲットとした事があったからだ。

もちろんアカツキを相手とした最後の時まで、ターゲットが誰であれただの一度たりとも仕事をしくじった事などなかった。

純正種が相手であっても、そこに例外はない。だからこそアカツキ暗殺を任されたワケであり、そこに今の境遇へと至る布石がある。

そんな彼だからこそ、純正種と呼ばれる相手がターゲットとしては最悪の部類に入る相手である事を知っていた。

十歳にも満たない純正種に……敵対組織に養育されていた子供相手に、手練れの暗殺者が何名も返り討ちにあった事がある。
組織のシマを荒らした純正種のストリートチルドレンを、制裁として殺した事もある。
同じ境遇の仲間で、組織を抜けようとした純正種を、ターゲットとした事すらもある。
その全ての仕事を、瀕死の重傷を負いながらもなんとか完了してきたが、その全てが紙一重であり、幾多もの幸運に味方された末の結果だと理解しているのだ。
彼らは産まれついての人外であり、超越種と呼ばれるに足る力の持ち主ばかりであり、他の人種では勝負を挑む事自体が無謀な事なのだ。

そんな純正種の力の源泉が、『世界』と呼ばれる固有の理を宿した領域だ。
目に見える現実世界に干渉し、あらざる現象を引き起こす異界を創造するなのである。

目の前の少年は、そんな純正種達の中でも最高の理を宿した世界を想像しえる、この国では皇と呼ばれた者の一人だ。
圧倒的に反則じみた力を、産まれつき持っている相手だ。
そんな相手に、ただのしがない『元暗殺者』風情が勝てるなどとは思っていない。かつて持っていた『最高』の称号を誇れるほど傲慢にはなれない。

――でも世界が脅威を感じていない、ってのはどういう意味かな？

世界が脅威を感じていない。その言い方だと、『世界という領域に意志がある』という風に聞こえてしまう。

単に純正種という人種が作る領域が、他者を判別し、敵となりうるかどうかを見極める能力があると言っているように聞こえてしまう。

「話す事はない。帰れ。今は気分が悪いんだ」

しかし、今の少年がそんな疑問をぶつけられるような状況にない事ぐらいはわかった。

彼の機嫌は最悪で、今のクロネコとの僅かな会話で、よりその機嫌は悪化した事だろう。

「まず君は勘違いしてるよ。俺はジョブ・キラーじゃない。元ジョブ・キラーさ」

それでも確認しなければならない事があった。だから必要以上に軽い調子で、今の自分の立場を明らかにしてみせる。

まずは少年の誤解を解き、アカツキと自分には彼に害意などない事を理解してもらう為に、両手を軽く掲げて何も隠し持っていない事を示す。

もちろん俯いていた彼に、そんな仕草が見えない事ぐらいはわかっている。しかし、そんな無防備な姿を晒す事により彼に対する誠意を示したかったのだ。

恐怖はあったが、それ以上に友人から自分に任された仕事をこなさなければ、という意志の方が強い。

――でもまずは懐に入り込まないとね。同じ『人殺し同士』ってだけじゃ繋がりも薄いし。

そう考えて、ここに来るまでに考えてきたプランを実行すべく言葉を重ねた。

「俺はね、クロネコっていうんだ。今は君の同僚さ。良ければ今日はここで泊まっていってもいいかな？」

１１・沙羅双樹の花の色～殺人者、二人～（後書き）

アカツキ視点ではない番外編。
でも繋がってます。
なぜか予約更新できないんですけど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0493m/

Mark of Black-Metals

2011年10月9日22時01分発行